
妹と義妹

秋山京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹と義妹

【Nコード】

N3585B

【作者名】

秋山京介

【あらすじ】

ちよつと道を踏み外している義妹の瑠奈。怪しい知識を次第に身につけていく妹の綾乃。二人の悪巧みの牙は兄の喉元へ……。この危機、兄は乗り越えられるのかっ！？そんな学園コメディです。ぜひご覧あれ

第1話：なんか敗北感…（前書き）

主人公の名字は【天宮】となっておりますm（|）（|）m

第1話：なんか敗北感…

「竜兄〜！ 朝だよ〜」

「う…ん」

下の階から聞こえてくる声で俺は目が覚める。

しかし俺は朝にめっぽう弱いために、すぐに布団から出ないと二度寝してしまう傾向にある。すると睡魔と俺の理性が戦闘を開始した。

睡魔：H P 9 9 9 9

理性：H P 6

・・・ふっ、朝の睡魔は無敵なり。R P Gで例えるならばレベル1の主人公がいきなり裏ダンジョンのボスに戦いを挑むようなものだ。絶対に勝てるわけがない。

そんなこんなで良く分からない思考を繰り返していても、時間が経つに連れて睡魔はより強力になっていく。

我が理性を一蹴し、俺を夢の世界へ……。

「とおっ」

「ぐはっ」

いざなえなかった。

「痛え…。普通に起こせていつも言ってるだろ？ 綾乃」

「ゴメンねお兄ちゃん、足滑らせちゃって」

黒髪のツインテールで身長は150未満のちびっ子、綾乃が俺の腹の上に覆い被さっていた。

てか足滑らせたって絶対嘘だろ。とおっ ♪ って楽しみにダイブして来やがったじゃないか。
胃が空っぽじゃなかったらリバーズしていたところだ。

しかし、俺の睡魔もしぶとい。渾身のダイブを食らっても未だ俺を眠りに誘おうとしている。

綾乃に乗っかられたままウトウトしていると、綾乃が俺の口元に濡れたタオルを置いた。繊維の隙間を水滴がコーティングし、空気の侵入を遮断する。つまり、俺は今呼吸が出来ないと言うことに…。

「ぶはあっ！」

「きゃあっ！」

寝ている体を急激に起こしたため、乗っかっていた綾乃はコロんと布団の外へと転がった。

「殺す気か綾乃お！ いや、それ以上にどこからタオルを出した！」

「……タオルの方が重要なの？」

む、我ながら愚かな質問だったか。

でもどこから取り出したのかは本当に気になるぞ。物理法則を完全に逸脱したわけだし。

もはや完全に睡魔は根絶やしにされた俺は背伸びをしながら立ち上がり、未だ床に寝っころがっている綾乃も立たせる。

「眠気もなくなったことだし、着替えるとするか」

「そうだね」

「というわけで、綾乃は自室に戻りなさい」

「やだ」

「……………」

俺は綾乃の襟を掴んで持ち上げ、強制的に部屋から退出させた。まったく、マセた妹だ。

綾乃はいつから道を踏み違えたのかを考えながら、俺は着替え始めた。

ブレザー系統の制服（今は春だからブレザー自体は着ないけど）を着て、俺は最初に聞こえた声の主が居るであろうキッチンへと歩き出した。

因みに綾乃は着替えるのが滅茶苦茶遅いからしばらくは降りてこないだろう。

遅い、のレベルはパジャマに着替えるだけで12分もかかってしまっただ。

何をどうしたらそんなに遅くなるんだか……。

「遅いよ竜兄^{たつにい}」

「すまん。綾乃とのトラブルでな」

「……また？」

そう、先ほどのようなやり取りはもはや日常茶飯事なのだ。

因みに今俺と話しているのは義妹の瑠奈^{るな}。背中の真ん中あたりまでのポニーテールで少々茶色がかつてる。こいつもトラブルメーカーだ。はあ、気が重くなる。

気を取り直して朝飯を作っている最中の瑠奈の後ろで新聞を見る。……だれだ、親父くさいなんて言ったのは。安心してくれ、俺は番組表と4コマ漫画しか見ないから。

「ねえ竜兄、ここにあったタオル知らない？ 急に無くなっちやっただけだ」

……。

綾乃は魔術師か！？

「ここにぞ」

さつきさり気なく置いたタオルをもの知らぬ顔で指差す。

「貸して〜」

「ほれ」

差し出された手にタオルを渡し、再び番組表に目を通す。

すると俺としたことが、コップに入っていた水を少しこぼしてしまった。

「あちゃ、やつちゃったね」

「ああ。タオルほおってくれ」

「うりゃ！」

白いタオルは瑠奈の手から離れると、弧を描かずに真っ直ぐ俺の顔に飛んできた。つまり速球。

「誰が投げると言った。ほおれと言ったんだぞ俺は」

「無事に受け取ったんだし気にしない気にしない♪」

この妹どもは…。

被害が無かったので、俺は水浸しのテーブルをタオルで拭いた。拭いたタオルを洗面所で絞ってキッチンへ戻ると、丁度朝飯が完成していた。

さらに狙ったかのように綾乃も着替え終わって、上から降りてきた。

記録は8分41秒。奴にしては凄いスピードだ。

「オハヨー、綾乃」

「オハヨ、瑠奈姉」

そう、実は瑠奈のほう若干お姉さんなのだ。3日違いだけらしいがな。

そして2年ほど前に瑠奈がうちに来たわけだが、急にお姉さんになりたい！と騒いだので綾乃が妹として現在に至っているわけで。

「竜兄、何時までもタオル握って立ってないで、座ろうよ」

「そうだよお兄ちゃん」

「ああ、ちよつとお前らの説明をな」

「誰に？」

可愛らしく首を傾げる瑠奈。頭と一緒に動くポニーテールがまた可愛さを引き立てる。

「画面越しの神々に」

「ふゝん。それより早く食べないと遅刻だよ」

既に食べ始めている瑠奈と綾乃。遅れて俺も食べ始める。

「ほうた、おひいひゃん」

「包帯お爺ちゃん？」

綾乃の発言を瑠奈が訳す。たしかにそう聞こえないこともない。てか包帯だらけのお爺ちゃんがいたら大変だろ！

「口の中を空っぽにしてから話せ」

もう朝飯を平らげた俺は食後のコーヒーを飲みながら綾乃に言う。

「そっだお兄ちゃん、今日のお昼は一緒に食べよ?」

「あ、私もー」

「だが断る」

即答した。早押しクイズの優勝者にも負けなくらいの反射速度だ。

比較的可愛い部類に入る綾乃と瑠奈が俺を慕ってくれるのは嬉しい。嬉しいのだが、悪意無きトラブルメーカーだから始末に悪い。

「え」

「竜兄、良いじゃん」

「ダメなものはダメだ。友達と食べなさい」

綾乃と瑠奈の空っぽになった皿を取り、流し台に置き水をはる。

「瑠奈、早く着替えこい。学校に遅刻しないように」
「はい」

瑠奈が着替えている最中、俺と綾乃は玄関で待つことにした。

あ、因みにここの家族構成を話すと、再婚した両親は多忙の上単

身赴任でなかなか帰ってこない。

だからこの家には俺と綾乃と瑠奈で住んでいるわけだが、俺には血のつながった兄が一人いる。

大学の寮にいるからたまにしか帰ってこないけど、超人的な上にシスコンだからうつとうしいことこの上ない。ま、近々参加することになるだろうね。家族構成を一通り話すと綾乃が口を開いた。

「ねえお兄ちゃん」

「なんだ？」

綾乃は何か聞きにくいことでも言いたいのか、少し顔を赤める。

「……お兄ちゃんって、たまってる？」

「……なんで？」

急に何を言い出すんだこいつは。普通は絶対に聞かないだろうこんなこと。

「朝、お兄ちゃんのSonが…モゴモゴ」
。。。。

綾乃、それは仕方ないことなんだよ。

男子ならば必ずあることだ。そして、やりたくてやってる訳じゃないわ！

「綾乃、それはもうちょっと大人になれば分かるさ。だが俺は欲求不満なんかじゃないぞ」

変な作り笑いをしながら綾乃の肩に手を置く。

もう綾乃の顔は耳まで真っ赤に染まって、オクトパスと良い勝負だ。で、玄関の真正面に位置する階段をふと見ると、瑠奈の姿が。

そして瑠奈は会話を聞いていたのか、視線を下ろして不敵な笑みを浮かべる。

そして一言。

「……ふっ」

・・・。

なんか凄え敗北感……。

「ああもう！　早く学校行くぞ！」

こうして俺たちの長い生活は幕を開けた。

・・・朝は妹たちが入ってこれないようにしよう。

第2話：魍魅魍魎（ちみもつりょう）、登場

俺の歳は17、綾乃は16で瑠奈も16。

俺はこの3人の中で一番頭が悪いため、公立には落ちた。だからここ、【蒼香学園高等学校】に通っている。この学校はいわゆるマンモス校であり、公立が受からなかった奴の大半はここに流れやすい。

因みに綾乃も瑠奈も中学生の偏差値を見ると平均72という化け物じみた数値を誇っていた。

うゝむ、瑠奈はともかく綾乃まで頭良いのは納得行かん。そんなことを考えていると、もう校門前である。

「ふう、なんとか遅刻しないで着けたな」

「お兄ちゃんが欲求不満だったなんて……」

「まだまだ未熟だね、竜兄」

うるせえ……

俺が普通の会話をしているのに、未だ朝のことを引きずってるのか。2人の妄想癖は置いといて、俺は1人校門の中へと入っていた。

中に入ると生徒会執行部が挨拶運動に励んでいた。

「おはようござい……って竜也か」

「ちゃんと最後まで言えよ、悪友その1」

「名前で呼べよ……」

「分かった。1」

「違うわぁ!」

五月蠅いなあ。仕方ない、名前を言ってやろう。

あれ? うーん、うーん……。.

「すまん、真面目にお前の名前を忘れた」

「じゃあヒントをやろう!」

いや、いいよ。素直に名前を述べてくれ。

そんなことを言いたい俺を無視して悪友その1はヒントを言う。

「ヒント:2年生になって初めて声をかけたのは誰ッ!?」

悪友その1よ。それはヒントでは無く解答だ。ヒントってのはちよつと遠まわしに物を言うもんだぞ。

ん? 待てよ。何となく思い出して来たぞ。

「そうだ、ちみそつらつら魑魅魍魎だ」

「…ぶっ飛ばすぞ」

「冗談だ、海斗」

もはや発狂寸前になっている海斗をなだめる。するとやっと現実に戻ったのか、綾乃と瑠奈がスカートをヒラヒラさせながら小走りで近づいて来た。

「もう……、勝手に行かないでよお兄ちゃん」

「これあげるから落ち着いて、竜兄」

息を切らしている綾乃の肩に手を置き、瑠奈が渡して来た雑誌を手取る。

【PLAY BOY】

・・・。

いるかこんなの！

「あつ！ 28分だよ！」

「何！？」

綾乃が腕時計を見て叫び、それを聞くや否や海斗を除く3人はそれぞれ別の教室へと散っていった。

自分の教室に入ると、まだ先生の姿は見つからなかった。どうやらギリギリセーフだったようだな。

「おいーっす！ クラスメートA～Zの諸君！」

クラス全体に響き渡る声で挨拶をし、自分の席にどっかと座った。座ると同時にゴリラ…もとい担任が入って来た。色黒で毛むくじやうで腕力が以上にある担任だから困ったもんだ。あいつのアイアンクローで俺の友人が何人気を失ったことか。

まああいつのイスに画鋏をコーティングしていた俺らも悪いのであるがな。

そしてゴリラが出欠を取っている最中、海斗がクルクル回りながら教室に入って来て問題発言をする。

「グッモーニン、ゴリラア！！」

その一言によりクラスの大半は笑いの臨界点を突破した。なんとか耐えた者でも肩を振るわせている。

当然海斗は担任に廊下へ連れ出される羽目になり、首根っこを掴まれた。

「ノオオオ！ 助ける、マイフレンド！」

「自業自得だ、大人しく成仏しろ。骨は拾って、また捨ててやるから」

「マンマミーア！」

手からファイアボールを出せるおっさんの真似してんじゃねえよ。

ゴリラに拉致されしばらく騒いでいた海斗だが、過去最高の絶叫

と共に静かになった。

戻って来た担任の上着に赤い何かがついてるのは見なかったことにしよう。

海斗が戻って来ないまま午前中の授業は始まり、俺は窓際に座っていたため現実逃避も兼ねて校庭を見下ろしていた。

すると見慣れた女子がこちらに手を振っている。綾乃だな。

軽く手を振り替えし、先ほどからベランダの端をうろちよろしている奴を見る。

「やほ、竜兄」

「瑠奈!？」

俺は周りにいるクラスメートらに聞こえ無いよう小さな声で話す。
ま、後ろの席の奴らにはモロばれなんだけどね……。

「お前授業はどうした」

「教師に手帳見せたら泣き出して自習になっちゃった」

手帳怖え！

何書いてあるのか非常に気になるところだが、見たら俺まで泣きそうだから止めておこう。

「あ……」

「ん？ どした？」

すつと死角に入り姿が見えなくなった。　なんだアイツと思って前を見ると、ゴリラが俺の前に立っていた。

「バ、バナナは持ってませんよ…？」

その後俺は軽やかに頸動脈を締められ、ドリームワールドへと強制的に送られてしまった。

「いててて……」

4時限目の授業が終わり、今は昼食の時。締められた首に残っている痛みをさすりながら弁当を取り出し……。

あれ？無い。忘れてきたのか？

うーん。……食堂に行くか。カバンの中から財布を取り出しズボンの後ろに入れ、教室から勢いよく飛び出した。

すると先ほど校庭で体育をしていた綾乃にぶつかった。

「あんつ、お兄ちゃん、ここは学校だよ……」

「……どこでそんな言葉を覚えた」

下ネタ発言、お兄ちゃんは許しませんよ。

「あそこだよ」

綾乃が指差す先、そこにはヘラヘラと笑っている海斗の姿があった。顔にはゴリラサイズの手跡が残っているが、やはり貴様だったのか。

ここはあえて無視しようとしたのだが、口パクで『ふぬけ』って言いやがったので鳩尾に右膝を叩き込んだ。

「もうお兄ちゃん、暴力はダメだよ」

「これはお前のためなんだがな」

妹には健全に生きて欲しい兄としての愛情表現だ。シスコンでは無いのであしからず。

「そっぴや瑠奈は？」

「瑠奈姉なら、先に屋上で待ってるってさ」

「ふん。で綾乃、海斗に教えられた知識は今日中に忘れなさい」

床にうつぶせで倒れている海斗を踏みながら注意する。

「なんで？」

なんでって……。それは俺の本能が覚醒……じゃない。

「妹の道を正すためだ」

「ふむふむ。つまり野獣になっちゃうの？」

何をどう解釈したらそうなるのだマイシスターよ。

とりあえず俺はもう一度海斗を踏みつけた。ぐきゅっ！　って凄
い声を出したが恐らく大丈夫だろう。

「と！　に！　か！　く！　　なんとしてでも今日中に忘れ
てくれよ」

綾乃の両肩に両手を置き、揺すって理解させる。

「あ、あわわ…。分かったよお、忘れる」

「よし。じゃあ俺パン買ってから屋上行くから。瑠奈にもそう言っ
といて」

本当は一緒に食べたくなかったのだが海斗の魔の手が伸びてい
る以上、綾乃と瑠奈の安全を考え、我慢するしかないだろう。

「うん…。分かった」

目が回ったのか、おぼつかない足取りで階段を上がっていく綾乃。

何か不適切発言が出たら、全ては海斗の責任になるだろうな。

第3話：竜兄の苦悩

学生達の戦場である【食堂】。我先にと片手に金を掴んで商品の名前を叫んでいく。

食堂で働いてるおっちゃんやオバサンたちは総動員されても対処できないほどに入り乱れている。商品の奪い合いになると不良も良く分からない発言もしたりする。例えばさっき…

「バカやろう！ パンが上手いから焼きそばパンが売れるんだろ
うが！」

「はっ！ 焼きそばが上手いからこそ焼きそばパンが売れるのさ
！」

なんてやり取りがあった。このドレッドヘアのいかつい兄ちゃん
とスキンヘッドのゴツい兄ちゃんの焼きそばパンにかける熱き心は
十分伝わる。

だがそれだけのために乱闘を起こそうするのは如何なものか？

今にも取っ組み合いを始めようとしたとき、どこから突如ゴリラが乱入してきて二人を瞬殺したことは言うまでもなく。

不良二人はどっちも80kgはありそうなのに張り手一つで5mほど回転しながら宙を舞ってたし。・・・ゴリラ恐るべし！

そついや某戦闘民族が月を見てしまい、猿かゴリラみたいに变身するよな？ だからアイツはその末裔なんじゃないか、なんて噂があったりなかったり。どっちにしる迷惑千万だな。

さて、色々話しているうちに戦士（生徒）の数も少なくなっている。早くパンを買って綾乃と瑠奈の所に行かないと、何を言っているか分かったもんじゃない。

えーっと、パン、パン…。

・・・。

一つも無え…。

必死にガラスケースの中にある昼飯を探していると、食堂のオバサンが話しかけてきた。

「あら残念ねえ、もう全て売り切れちゃったわよ」

「マジっすか？」

くっ、このままでは俺の胃液が胃を溶かして養分にしてしまう。かと言って綾乃たちにせがむわけにもいかんし…。仕方ない、飲み物だけで紛らわすか。

というわけで俺は缶コーヒーを買い、綾乃と瑠奈用にお茶も買って食堂を後にした。階段をダッシュで上がり、屋上の扉に手をかけようとしたら勝手にドアが開いた。

ちょっと驚いていたら外から人が入ってきた。入って来たのはサッカー部の部長で、将来性ありと言われている先輩だった。

この学園に限らず、他校から告白しに来る子が後をたたないとか羨ましい限り。しかし妙に全身が真っ白で生気が無い。まるで生きる屍みたいになっている。

どうしたんだろ？

今にも死にそうな先輩の横をすり抜け、綾乃たちがいるところを探す。

あ、いたいた。

「遅いよお兄ちゃん」

「すまん。食堂の熱き戦いに心を奪われてな。ほれ、お茶だ」

両手に持っているお茶を二人に渡す。

「ありがとう」

「ありがとう」

ん？ 瑠奈の機嫌が悪いな。

「どうした瑠奈。機嫌悪そうだが」

「ちょっとね。さっきこんな事があったの」

瑠奈に色々話されたことを要約する。瑠奈と綾乃が話していると先ほどの先輩が瑠奈に付き合ってくれと言ったらしい。

うんうん、青春だねえ。すると瑠奈はこういったらしい。『私の視界から数秒以内に居なくなって下さい』

・・・うわあ、えげつねえ。

さっき横を通った時、ウルトラマリンの香りがしたからかなり気を使ってきただろうに、その先輩へ凄いこと言うよなあこいつ。

「お前さあ、もうちょっと言葉選べよ」

「敬語使ったよ？」

ああ、確かに使ったな。その点は合格だ。だが、男の子の心は繊細なんだぞ。特に高校生は。

「まあ良いや。とりあえず飯食べてな」

綾乃が自分の隣をポンポン叩いているので、綾乃と瑠奈の間に座る。

「あれ？ 竜兄のは？」

「ああ、カバンの中に無かったから多分忘れて来た」

「ちえゝ、お兄ちゃんのお弁当楽しみだったのにい」

俺の家では弁当は各自作る事になってるんだ。俺は朝に弱いから昨晚に作っておく。だからたまに忘れてしまうのさ。

ま、持つて来ると来るで綾乃と瑠奈に大半食われるんだけどね。グスン。

「あ、そうだ」

綾乃が急に何かを閃いた顔になった。

あ、やな予感。

「はい、あゝん」

自分の弁当に入っているダークネスな色をした卵焼き(?)を箸で取り、俺の口元に運んできた。やっぱりこういう展開か・・・。

因みに、料理の腕を比較すると

瑠奈>俺>(中略)>>>>(省略)>>>綾乃

くらいだな。とりあえず神、いや悪魔の領域に入っていることだけは確かだ。食べた瞬間、死神が見えること間違いない。

「はい、あゝん」

「いや、遠慮させてもらっ」

口を固く閉ざし、満面の笑みの綾乃とは反対側を向く。すると、

瑠奈が笑ってご飯を差し出してきた。

「ほら竜兄、私のなら大丈夫でしょ？」

「ま、まあな」

確かに瑠奈の作る料理は上手い。さすが家庭科5だ。だが、瑠奈のだけ食べて綾乃を食べないなんて兄としてはやりたくない。というか妹たちから分けてもらう訳にはいかない！ というわけで…。

「戦線離脱っ！」

「あっ！」

「逃げたあ！」

ベンチから勢いよくスタートダッシュをして逃げだす。ふふ、蒼香学園のジャッカルと【自称】している俺には追いつけんさゝなんて余裕から首だけ後ろを向けて走ってみる。

「待ってよお兄ちゃん」

弁当を持ちながら走ってくる綾乃。あれ？ 綾乃は走って来てるのに瑠奈は座ってるまま。そうか、追いかけるなんて事はしなくなつたんだ。奴も大人になったということだな。なんて思っていると瑠奈は両手を口元に持っていていき、叫ぶ。

「竜兄は足フエ」

俺は瑠奈が言い終わる前に華麗な弧を描いてUターンをし、もはや瞬間移動に近い速さで戻って瑠奈の口を手で軽くふさいだ。

「何叫んでんだよ瑠奈あ！」

フェの後にチなんて言われたら大変なことになる。すると瑠奈は俺の手からもぞもぞと口を出した。

「ぶはっ。アハハ、こう言えば戻ってくると思つてさ」

・・・くそう。この俺が瑠奈の手のひらで転がされるとは。俺はとりあえず瑠奈から完全に手を離す。

「でも本当のことじゃない」

「ちがぁーっ！」

瑠奈のその発言により周りにいる人、特に女子は何人が退いた。いや、ドン退きした。ああ、入学当初から綿密に組み立てて来た『俺に対してのイメージ』が音を立てて崩れ去っていく・・・。

「やっと追いついたあ。はい、お兄ちゃん」

「また逃げたらもつと凄いこと言うよ、竜兄」

ぐ・・・。綾乃も俺と瑠奈がいるベンチへと戻って来た。

そして後ろからは綾乃が、前からは瑠奈がそれぞれ箸を伸ばしてくる。前門の虎、後門の狼とはこのことかっ！

俺は心の中で必死に『南無三!』を唱え、瑠奈の料理で綾乃の料理を中和出来ることを祈り、口の中に入れた。

一噛みした途端……。俺は血と黒い煙を吐き出しながら豪快に倒れた。

「ああっ! お兄ちゃんが口から煙を出して倒れたあ!」

「……なんで煙が出るの?」

コンクリートの冷たさを頬に感じ、薄れゆく意識の中瑠奈が持っていた弁当が目に入った。その弁当の端にはデッカく『綾乃』って書いてある。

・・・中和どころか破壊力が増したのか。

そして俺の意識が無くなる時、網膜に焼き付いた最後の1コマ。それは俺を見下すように笑う瑠奈の顔。

・・・貴様、確信犯かあ!

第4話：女の涙は最終兵器？

「おい、起きろ」

「うぐ…。海斗か。ここは…？」

「保健室だ。綾乃ちゃんと瑠奈ちゃんがお前を抱えてきてな、大変だったんだぞ」

「なんだ、気絶してたように眠ってたのか」

「いや、正真正銘の気絶だった」

「……」

そうか、俺は昼飯を食べて倒れたんだっとな。はあ、酷い目にあった。口の中が苦い…。同じ材料を使って、どうやってたらあんなDEATH弁当を作れるのかが不思議でならない。

俺は未だにクラクラする頭を我慢してベッドから下りた。

「ところで今何時？」

「竜也は3時間ほど気絶してたから、今は4時半だな」

4時半か。今から部活行ってもしやあないし、今日は真っ直ぐ帰るとするか。

「んじゃ俺帰るよ」

「分かった。氣いつけて帰れよ竜也」

「お前もな」

海斗と一緒に保健室を出て、それから別れた。

俺は今美術部に在籍してるんだけど、正直もう辞めたくて仕方がない。美術が嫌い、つてことはない。むしろ芸術作品を見に行くことはかなり好きだ。俺が辞めたい理由、それは後々語られる日が来るだろう。ま、“ある先輩”のせいだと言っておくよ。

俺は自分の教室からカバンを取って帰宅する。さて、ここからが最大の難関所だ。

帰宅部所属の綾乃と瑠奈。今の俺にはコイツ等と一緒に帰って、突っ込みを全て入れられる自信は無い。例えていうならば、MPが無くなった魔法使いに『あいつと肉弾戦して来て』と懇願するようなものだ。あまりにも酷である。

だから俺はあの二人とエンカウントしないように裏門から家に帰るのさ。007の動きを思い出しながら、俺は忍び足で裏門の近くまで歩いて行った。門さえ突破すれば、あとは警戒を解いても大丈夫だ。

……よし！ 門突破！

「何喜んでるの？」

「竜兄、頭……大丈夫？」

……。ふ、ふふ、今聞こえた声はきつと幻聴だ。我が妹たちに似てる顔の人が門の横に居るが、きつと人違いだ。うん、きつとそうだ。そくに違いない。

「瑠奈姉、お兄ちゃんどうしたのかな？」

「さあ……。とにかく、帰るよ竜兄！ この足フエ」

「シャラップ！」

はっ！ 突っ込んでしまった……。つたく、瑠奈は俺をいじめて何が楽しいんだか。

「瑠奈姉、その足フエ……ってなんなの？」

「ああそれはね、竜兄が……」

「綾乃、お前にはまだ早い」

俺は瑠奈の言葉を遮るように言葉を発した。これ以上こいつの口を開かせると犯罪者になりかねない。

「それはそうと、何故俺が裏門に来ると分かった？」

「「女の勘よ」」

「さいですか……」

見つかったもんは仕方ない。帰るとするか。

この学校の周りには食べ物関係の店などが結構並んでいる。女の子が友達とケーキを食べに行ったり、野郎共が大食い勝負をふっかけにいたり、可愛いウエイトレスと格好いいウエイターがいると評判になっている店もあつたりする。

どの店も商売繁盛しているからか、よくセール期間になったりしてより客を得ようとする働きも見受けられる。

俺は甘いものはあまり好きじゃないからカツ丼とか牛丼のほうに惹かれるのだがここの店の店、特にケーキ関係の店の前を通ると、ある奴が騒ぎ始める。

「ねっねっ、竜兄、ここ入ろ？」

そう、瑠奈だ。

「我慢しろ。綾乃だって我慢してるんだ。なあ、綾乃」

後ろにいる綾乃の方を向く。

「ひゃあ〜…」

・・・。

ダメだ。何にも発言しないから我慢してるかと思いきや、思いつきりキラキラした目で店を見てるよ…。

「綾乃、よだれ少し出てるよ」

「あつ、ごめんね瑠奈姉」

「……どこで拭いてやがる綾乃」

「ふえ？」

こいつ俺のシャツで拭きやがった。洗い立てなのに。しかもふえ？　ってなんだよ。いかにも当然のような声を上げてんじゃねえ！

「ねえ竜兄、多数決で2対1だし入ろうよ」

「各自自腹なら良いぞ」

「ええー、お兄ちゃんのケチッ！」

「ケチ言うなっ！」

以前コイツらは俺の奢りだと決まると、手のひらをかえすようにバカス力食った。しかも友人まで呼んで更に食いやがった。店の人は笑ってるか呆れてるか同情の目で俺を見てきた。つらかったなあ……。

しかも、出費は安くありませんでしたよ。計1万突破したからな。まさか喫茶店で1万突破するとは夢にも思わなかったさ。それ以来、俺はコイツらにあまり奢っていない。

「じゃあ良いよ自腹でも。それより早く入ろっ」

「分かったよ」

お、珍しく俺の考えをすんなりと受け入れてくれたな。明日、空から槍降ってくるんじゃないか？

「竜兄、槍がどうかした？」

「よし綾乃！ 早く中に入ろう」

俺は瑠奈の言葉を強制的に聞かなかったことにし、綾乃の背中を押しながら店へと入っていった。

心を読めるほどに成長したとは…。明鏡止水、早く会得しないと！

「おお」

「へえ」

「ほお」

『リニユーアルオープン！』とでかでかと書かれていたから入ったのだが、中は白を基本とした、清楚なイメージで作られていた。

インテリアに使われているものも決して安くはないだろう品を使っている。客はやはり中高生を中心とした女性で埋め尽くされていた。

とりあえず店の雰囲気には驚きつつも窓際の席にカバンを置く。

「ふう、なかなか良い感じの店だな」

「評判良い店だしね」

「じゃ私たちはさっそく」

荷物を置くと綾乃と瑠奈はケーキの方へまっしぐらに走っていった。なんで女の子って甘いのが好きなんだろう？

俺は特に食べたいものは無いのだが、何も食べないというのも気が引ける。幸いこの店はバイキング形式なので、一番安いケーキとコーヒーだけ選んで元の席に戻った。

すぐ近くに置いてある観葉植物をばーっと眺めると、瑠奈たちがシヨートやらレアチーズやらモンブランやらを皿いっぱいに乗っけて持ってきた。

「良く食べるねえ……」

「お兄ちゃんはそれだけ？」

「貧困人ねえ」

「うるせえ」

本当は入りたくなかったんだから仕方ないだろう。

「まあ良い。食べるとするか」

「そうだね」

ミニフォークで端っこを切り、口の中へと運んでいく。

「おっ……」

これは…。

「このケーキも凄いいけど、綾乃の可愛さにはほど遠いわね。」

「甘いい。」

・・・普通に美味しいと言え。スピードワゴ。風に言われても反応に困る。

まあ確かにこのケーキ、今まで食べてきた中でもトップクラスの美味しさだ。クリームとスポンジの相性も抜群。まあケーキには詳しくないからあんまり上手く言えないけど、とにかく旨い。

俺は1個だけと言うのもあつてすぐに食べ終わり、コーヒーを飲んでいる。このコーヒーも香りが良く…ってこんなことを話していてもつまらないだろうから、省くね。

瑠奈と綾乃が話しながら食べているので、俺はケータイを見ながら暇つぶしをしている。そんな時間が30分ほど過ぎた辺りで、

「美味しかった。」

瑠奈と綾乃が食べ終わった。

「さて、それじゃ会計に行くか」

ケータイをしまつて、各自に荷物を渡しながら立ち上がった。瑠奈たちも笑顔になって立ち上がる。そして今はレジの前。

30分500円のバイキングだったのだが、選ぶ時間などで45

分くらいはここにいたことになる。だから合計は、

「合計で3000円になります」

「んじゃ、各自払えよ」

「よろしくねえ、竜兄」

「よろしく」

店員に俺の分の1000円を渡したところで腕を止めた。よろしく？よろしくってことは俺が金を払うってことだよな。

「自腹って約束じゃなかったか？」

「今お金ないの……」

「だからお兄ちゃん、お願いっ」

金が無い。ならばそれが分かっているながらこの店に入ってたってことか？

「あのなあ、これは約そ……」

「……ダメなの？」

ぐはあっ！

コイツら……。男にとって一番鋭利で一番殺傷力のある『女の涙』を使うとはっ！

しかも状況を把握出来ていない店員からすれば『ある男が1000円ばつちで女の子二人を泣かせた』と言うふうにはしか映らない。実に最悪な展開だ。

「ああもう分かったよ…」

結局俺はレジの人に白い目で見られながら合計3000円を支払い、店の外に出た。俺の後ろには瑠奈、綾乃の順で店を出て来る。

そして俺は、見てはいけないものを見てしまった。目薬を慌ててカバンにしまう綾乃と瑠奈の姿。

・・・毎度毎度いいかげんにしてくれえ。

第5話：夜夜パニック

「いただきます」

「どうぞ」

綾乃がいただきますを言って、瑠奈がどうぞを言った。

今、天宮家は夕食の時間。うちの家事分担は瑠奈が料理を担当して、俺は掃除に洗濯に買い出し、綾乃は俺のサポートと言ったところか。

たまに俺と瑠奈の家事分担は逆になるが、それは後々のことだからほっておこう。

それより重大なことが、俺の目に映っている。今日はボンカレーだよって綾乃が言って来たから、俺はそれを信じていた。それなのに…。

「なあ瑠奈」

「ん？ どうしたの？」

俺と向き合うようにして座っている瑠奈は、スプーンを口から離しつつこちらを向いてきた。

「今、お前と綾乃が食べてるのはカレーだよな？」

「うん」

「コンロの上にあるのも、カレーだよな？」

「そうだよ」

なんの疑問も持たなくて、全て即答で返す瑠奈。じゃあ、これならどうだ！

「では聞こう。なぜ俺の夕飯はキムチ鍋なのだ」

俺は自分の真正面に置いてあり、グラグラと煮立っている鍋を指差した。が、指に湯気が当たった瞬間に手を引っ込める。

あつつう！

もはや湯気は一種の凶器と化していた。

「美味しそうだね、お兄ちゃん」

隣でパクパク食べている綾乃が俺の肩をつつく。

「じゃあ食べてみる」

「遠慮しまっす」

なら口を挟むんじゃない。これは春、しかも限りなく夏に近い時期に鍋物を出す非常識な奴と話してるんだから。

俺は綾乃のおでこに軽くデコピンをしてから、瑠奈のほうに向き直した。

「竜兄、キムチ鍋は美味しいんだよ？」

「それは知ってる。だが俺が聞きたいのはなぜ鍋物を作ったかだ」

「からかつてみよ…じゃなくて、食材が悪くなってたからだよ」

・・・良く聞こえなかったが、コイツ今『からかつて』って言わなかった？ うーむ、空耳と信じよう。

「はあ…。今こんな熱いのを食べたら死んでしまうから風呂入ってくる」

「お兄ちゃん。お風呂、関係くない？」

まあな。だがそんな細かいことを気にしたら負けなんだぞ？

「料理冷めちゃうよ？」

「それが目的だ」

というわけで、俺は自室から着替えと読みかけの小説を持って風呂場へ向かった。・・・幻聴か分らないが、『風呂場に本持つてくなんて！』って声が聞こえる。その問いに答えよう。

「妹たちがウルサくて本に集中出来ないんだよー！」

俺が本を読み始めると必ず俺の部屋にどちらかがやって来て、CD貸せだのお前はもう死んでいるだの好き勝手なことを言って邪魔をする。あまつさえ俺の布団に潜り込んで爆睡したりしやる。綾

乃だけが。

さて、そんなことを説明してるうちに風呂場に着いた。

実は夕食後に風呂へ入る予定だったため、もう焚き終わっている。そして俺は既に服を脱いでおり、もう湯船に浸かっている。

「ああ……。体の芯まで癒やされるー」

我ながら爺臭くなったなと思いながら、読みかけの本を読み始めた。

本を読み始めてから30分ほど経った。体も髪も洗って綺麗にし、今まさに立ち上がるうとした。

「お兄ちゃん、入って良い？」

扉越しから聞こえてくる声を聞くと、俺はヒンズースクワットをするが如く腰を落とし、湯船へ再び浸かる。

「な、何しに来た！」

「え？　前みたいに背中流し合いたいなあって」

前って言うな、昔といえ！　しかもそれは幼稚園の時くらいの話だぞ。

「綾乃ももう高一なんだから、一人で入りな」

「むゝ、分かったよう」

「それと、むゝは止める」

「めえゝ」

「……もう良いや」

止めろって言うて『めえゝ』って返って来たのは初めてだ。我が妹ながら意味分からない奴だな。

「とにかく脱衣場から出ていってくれ。着替えられん」

「ほゝい」

綾乃は意外と素直に脱衣場を後にした。なので俺はすかさず風呂から出て服を着、キッチンに向かった。

「次入って良いぞー」

濡れたままの髪をタオルで拭きながら2人に伝える。すると瑠奈が入ることに。

「私が上がってくるまでにキムチ鍋を食べ終わっててね」

ちっ、覚えてやがったか。

「前向きに善処してみるさ」

俺はとりあえず流しながら返事をし、再び鍋と向き合うように座った。30分経ったおかげか、やっと食べられるような温度だ。

少しずつ食べていくとすぐ腹が膨れるし、辛さに耐えられないだろう。だから俺はあまり間隔をおかずに食べる道を選んだ。

「やあつてやるぜ！」
・・・。

『しばらくお待ち下さい』

—— 15分後 ——

「し、死ぬかと思った…」

額から出てくる大粒の汗を拭いながら、完食して空になった鍋を洗っている。

キムチ鍋とかいいながら、タバスコやらハバネロやらめちゃくちや辛いものの味がした。並の人間ならばあまりの辛さにショック死するくらいだったし。

「ふわぁ、お兄ちゃん良く食べたね」

「食べ物粗末に出来んな」

舌と唇の感覚が麻痺しながらなんとか洗い物を終わらせ、綾乃と一緒にリビングへ。

ソファーに腰掛けてTVを付けると、青い猫型ロボットが出てくる番組が目に入った。

「声が変わってるううう！」

「み、耳元で騒ぐな……」

てか今頃気づいたのかお前。毎週見てたじゃないか。

確かに声が変わった時にはかなり驚いた。海斗もこんなの偽物だ！
なんて騒いでたしな。

「そういえばお兄ちゃん」

「ん？ どした」

「このロボットって世界を滅ぼせるんだよね？」

「……ああ」

いつの話か忘れたがネズミが出た時に核ミサイルを取り出して、地球もろとも滅ぼそうとしたことがあった。中古のくせに核ミサイルを持っているなんて……。

他にも空気を圧縮してから放出する砲、気配を消せて目に見えなくする帽子、空間を超えるドア。

全て完全犯罪を引き起こせる代物だ。2112年からの地球は大変だろうな。

さて、綾乃がTVに集中していて、瑠奈が風呂に入っていると言う

ことは、俺は自由。フリーだ。なのでサッサと布団に潜り込んで寝るしかあるまい。そう思ってソファから立ち上がった時、

「竜兄どこいくの？」

瑠奈が帰って来やがった……。つか、

「……なんだその格好は」

瑠奈はホコホコと暖かそうな湯気を立ち上げながら、バスタオル一枚だけで体を包んでいた。

「え？　ちよつとのぼせちゃったから」

「……風邪ひかないようにな」

なるべく瑠奈を見ないようにして注意した。くっ、ここにいると死んでしまう！

逃げよ。俺は回れ右をして、ここから立ち去ろうとした。すると瑠奈が俺の前に立ちはだかり……。――。

ハラリとバスタオルを床に落としかがった！　俺は瞬間的に目を瞑った。

「は、早く何か着ろ！」

「竜兄の……えっち」

瑠奈は顔を赤らめて言った。はず。

え、確認しろって？　んなこと出来るかあ！　俺が慌てて瑠奈に背を向けると、

「なぐんてね」　竜兄、こっち見てみて」

「い、いやそういう訳には」

「いいから」

瑠奈は後ろから俺の頭を掴み、ほぼ180度回転させた。痛い・・・。そうして首が戻らなくなったとき、俺の目には水着を着た瑠奈の姿が映った。

「なんだ、水着着てたのか…」

「期待はずれだったでしょ」

俺の頬は瑠奈にプニプニ突っつかれて遊ばれ始めた。

「竜兄は本当に面白いねえ」

・・・このまま終わると思うなよ。というわけで、次回は竜也の逆襲編じゃあ！　ま、単なるイタズラなんだけどね…。

第6話：イタズラ始動

さて、前回の予告通りにミッションを開始しようと思う。

幸か不幸か明日、瑠奈は友達と映画を見に行くと言って出掛けるので、家にいるのは俺と綾乃のみになる。

まあ綾乃のことだから簡単に騙せるだろうと思って、ふかふかの布団にくるまって寝た。

そして今日は土曜。学校は休みなのでゆっくりと寝られ、起きたらイタズラ開始と心に決めて寝ているのだが、いやに体が重い。

両腕はもちろん、足も動かない。しかも肺も圧迫されているために息苦しい。うーん、小さいころに憧れてた金縛りが今来たか。

とりあえず俺は最悪の展開を恐れながら、恐る恐る目を開けた。

・・・

「自分の部屋で寝やがれ綾乃お！」

「ふにゃ…？ おはよー…お兄ちゃん」

寝ているのか寝ていないのか良く分からないくらいに目を開けた綾乃が俺の上に覆い被さってた。しかもご丁寧に手足をロックして…。先手を取られるとは、俺もまだ未熟か。

「とりあえずどきなさい。そして自分の部屋で寝なさい」

俺の胸の位置で静かに寝息をたてている奴に言う。まあただ言っただけじゃ絶対に起きないので、軽くほっぺをこねくり回しながらだけどね。

コネコネ……。

「むー…。もうちょっと…」

「それはダメ」

コネコネ……。

「……すう」

コネコネ……。

……。

こいつほっぺを色々といじられてるのに寝やがった！

凄まじいまでの眠気だな。

とりあえず何時までも妹と同じ布団にはいられないので、綾乃を横にズラして、這い出た。仕方ないので、デッカいあくびをしながら階段をおり、誰もいないキッチンへ向かう。

キッチンに入って目に飛び込んできたのは、既に出掛けた瑠奈の置き手紙だった。えーと、内容は……と。

《綾乃の朝ご飯は冷蔵庫の中に、竜兄のは冷凍庫にそれぞれある

から。昼は適当に食べてて。それじゃ、行つて来まーす♪》

・・・。

行つて来まーす♪　じゃねえだろ。なんで俺のだけ冷凍庫に保存されてんだよ。

明日覚えてろよ瑠奈。お前には俺が考えることが出来る最大級のイタズラをお見舞いしてやるからな！

なんて良いながら冷凍庫に手を伸ばす。目玉焼きとかが凍つてたら嫌だな…。

ゆつくりとドアを開けると、レトルトカレーがタッパーの中でガチガチに凍つて入ってた。はあ、解凍めんどくせえ……。

タッパーの蓋を外し、電子レンジの中で加熱しながら、俺はイタズラ計画を開始した。

現在の時刻は10時。瑠奈が帰つて来るのは予想では5時あたりだから、4時まではイタズラ出来る。因みに、スケジュールはこうだ。

『AM11時、は虫類大作戦』

『PM1時、勘違い大作戦』

『PM3時、ガキつぱく耳に息大作戦』

・・・。

我ながらくだらない発想だ。でも綾乃にはこれ位が丁度良いはずだ。回避は出来ないはず。多分。

そうこう話しているうちにカレーが解凍出来たので、食べ始める。ただし超スピードで。

人外の早さで完食した俺は、昨日買ってきたカエルやら蛇のオモチャを取り出した。

どこから？　なんて突っ込みは禁止です。このオモチャは一瞬本物と思うほどの出来。重さ、柔らかさ、感触、全てが気持ち悪いほどクリソツ（死語？）

それを綾乃がいる俺の部屋の前に数体配置した。

「さて、どう反応するかねえ」

キッチンのイスに座り、ケータイをいじり始める。俺の部屋から物音が聞こえてきたので、そろそろだな。

「……きゃああ！」

扉の開閉音と共に綾乃の絶叫する声が家中に響いた。意外に大声だせるのな、あいつ。

ドタバタと音をたてながら階段を降りてきた綾乃に挨拶する。

「朝からどうした」

「へ、部屋の前に、は、は、は」

「……なんで笑っている」

「違うよ！　　は虫類が！」

「なに、見に行こう」

俺はイスから立ち上がり単身階段へ向かい、は虫類シリーズを両手いっぱいを持ち上げながら、再びキッチンへ向かう。

「お、お兄ちゃんそれ！」

戻って来た俺を見ると、凄い勢いで後ずさりした綾乃。

「ああ、これはオモチャだよ」

蛇の尻尾を持ち、軽くぶら下げる。その姿を見た綾乃は、少しオドドしながら近づいてきた。

「…本当？」

「おお。どうだ、一発で目え覚めたる」

「脅かさないでよーお兄ちゃん」

ホッとした息をもらし、その場にペタンと座り込んだ。

「まあ良い。とりあえず俺は朝飯を食べたから、綾乃も早く食べるよ」

「分かったー」

ふむ、mission1は成功に終わったようだな。

綾乃の朝飯も電子レンジで加熱し始め、俺は居間のソファに座ってTVを見始めた。別にTVは点けなくて良いんだけど、次のイタズラまでは暇だしね。にしてもイタズラに成功したから安心したのか、単に寝不足なのか、急激な眠気に襲われた。

俺の睡魔の強さは既に知ってると思うから省くけど、今回の強さは世紀末霸王クラスだ。

奮闘むなく、俺は眠りについてしまった。

「えいつ
」

「…冷たっ！」

何者かの攻撃により俺は目覚めた。時計を見ると、今はPM2時。予定狂った……。

ガツカリしながら声のする方、つまり後ろを振り向くと綾乃の姿は無かった。ならば俺にこんな仕打ちをする奴はこいつしか居ない。

「なんでいるんだ？ 瑠奈」

「友達が急用できたらしくて、映画みたらそのまま帰って来たんだよ」

くそ、さらに予定狂った…。瑠奈がこの家にいる以上、綾乃に対してのイタズラはもう無理だ。ならばいつも俺に極悪非道なことをやる奴に天罰を下さなくては。といっても『耳にふーっ』とやるイタズラしか残っていない訳ではあるが。

え、勘違い大作戦はどうした？ うん、それもやろうかなと多少思ったんだけど。瑠奈の思考の早さでは、イタズラにならないので却下したんだ。

「とりあえずお帰り。それより、『えいっ』って言いながら俺に何をした」

俺の背中には水滴がいくつも付いていた。だいたい予想は出来るんだけどね。

「氷を背中に入れただけだよ」

やっぱりな。だって俺の足元に正方形の氷が転がってるしね。

「暇だなあ瑠奈も」

「竜兄ほどじゃないけどね」

それはどういう意味だオイ。俺は床に転がっている氷を拾ってから立ち上がり、流し台に投げた。部屋で作戦を練ようとして踵を返すのだが、

「そっいえばお昼食べたの？」

「あ……」

タイミング良く腹の虫が鳴いた。朝飯食べてから寝ただけなのになあ。消化の力も凄い。

「綾乃と私はさっき食べたから、あとは竜兄だけだよ。なに食べたい？」

「うーん、とりあえず普通のものを」

俺は苦笑いしながら瑠奈に言ってキッチンのイスに座り、イタズラの事を考えながら待つことにした。そして待つこと10分……—。

「出来たよー」

「お、ありがとう」

クルツと反転してきた瑠奈が手に持っていたのは、チャーハンだった。

ふむ、本当に普通の昼飯を作ってくれた。いつもこんな感じだったら、良い義妹なのになあ。

「今も良い義妹じゃない♪」

「ははは……」

勝手に心の中を読む奴に良いも悪いもあるか！ とりあえず昼飯

を食わないわけにもいかないのです、できたてのチャーハンを口の中に入れた。

「ふう、ご馳走様」

綺麗に平らげ、皿を持って流し台に向かう。皿に水をはって洗おうとすると瑠奈が、

「いいよ、私やるから」

と言って腕まくりしながら俺の横に立った。

もしかしてチャンス到来？ そう思った俺はすかさず瑠奈の耳に息を吹きかけた。まあ効果はあまり期待出来ないんだけどね。と思いきや、俺の予想を遥かに超えた反応が返って来た。

「ひあっ！」

耳に息がかかった瑠奈はすかさず手で耳を覆い、しゃがみ込んだ。これはまさか…。

「お前、耳弱いのか？」

「う…。よ、弱くなんてないよ」

顔を真っ赤に染め上げて立ち上がった瑠奈が言う。

そんな言葉を聞くと、再び同じことをしたくなってしまうんじゃないか。という訳で、また瑠奈の耳に息を吹きかけた。今度はピンポイントで。

「ふやあ！」

力無い声を上げ、よろよろと後ろに下がリイスに座り込んだ。一つ分かった。瑠奈は耳が弱いらしい。しかもかなりの度合いで。

「ほう、瑠奈にも可愛いところあるじゃないか」

「か、可愛いとかは別として、耳はもう止めてえ…」

瑠奈はイスの上で体育座りのような状態になっている。もちろん両耳は軽く塞いでいる。

「分かった分かった。とりあえず謝るよ」

俺は瑠奈の頭を撫でながら謝った。弱点が発覚した以上、瑠奈対策も完璧だな」

余談であるが、瑠奈は仕返しとして俺の晩飯は作ってくれなかった。そして料理器具から調味料に至るまで全て封印されたため、何も食べられなかった。

腹、減ったなあ・・・。

第7話：休みの日

「お兄ちゃん。早く早くっ」

「分かったから服引っ張るな」

玄関の鍵を閉めている俺の後ろでは、綾乃と瑠奈が立っている。

瑠奈はケータイをいじっているから恐らくはメールをしているのだろうが、綾乃は早く行きたいのだろう、俺の背中側の服をつまんで急かしている。伸びるっつの。

因みにどこに出掛けるかというと、近くにあるショッピング街だ。本当は瑠奈の機嫌を和らげるために行こうとしたのだが、綾乃に見つかって今に至る。

「竜兄、そろそろ行こっ」

「おうよ」

瑠奈はケータイをパツと閉じてカバンの中にしまい、俺は反転して二人のほうを向く。

「それじゃ、しゅっぱーっ!」

無邪気に片手を空へと向け、綾乃が音頭をとる。こういつのを見てると、家族の大切さが再確認できる。普段は小憎たらしい妹達でも、素晴らしいもんで。

「お兄ちゃん、なにニヤニヤしてるのかな？」

「さあ…。ファンシーなところがあるからねえ竜兄は」

「誰がファンシーだ」

くそつ、せつかく良いことを言っただけなのに台無しじゃないか。
しかも俺はファンシー（空想）じゃない。

「とりあえず行くぞ」

俺は二人から離れるよう小走りで動き出した。それに気付いた綾乃と瑠奈は慌てて追いかけてきた。

歩くこと15分。靴屋やら古着屋やらゲーセンやらが立ち並ぶ街『クリスタルロード』に来了。

なんでクリスタルロードって名前が付いたのか。それは天井の役割をしているものが透明で、空を見れる。そして夜になると、星や月の明かりが優しく降り注いでくれるのさ。うーん、ロマンチックだねえ。

「ってあれ？ 綾乃達が居ない…」

解説が終わったので後ろを振り返ってみたのだが、見知らぬ人達ばかりで妹の姿は全く見えない。

「竜兄、こっちこっち」

すると古着屋のほうから瑠奈の声が。俺は古着屋のほうへ歩き出した。

「先に行くなよ。あやうく嬉しく……じゃない、悲しくて帰るところだっただじゃないか」

「あはは、ごめんね」

瑠奈が軽いノリで返事をする。その手にはジーンズが一着。恐らくは買いたいやつなのだろう。

「欲しいやつか？」

「うん。ちょっと高いんだけどね」

「まあちょっとくらい高くても良いが」

そんなことを言っただけで値札を見てみた。8万。

。。。。

ちよつとどころじゃねえぞ。バイト代が一気に無くなるじゃないか。

「却下」

「ああん」

ジーンズを元あった場所に戻してくるよう促した。瑠奈は可愛く

口をとがらせて渋々と歩いていった。

いきなりあんなの持ってくるか？ なんてため息をつきながら古着屋の中を見渡す。15〜20歳あたりの人がかなりの人数で動いており、改めてこの店は優良だと思う。

「おにーちゃん」

「おう、決まったのか？」

横の方から綾乃が来たので、そちらを向く。

「一応ね」

「ふーん。見せて」

「良いよ はいっ」

そう言われて渡されたのは、カゴ二つ。しかも満杯。タイ付きシヤツやらデニムのスカートやらが溢れんばかりに入っている。血いつながって無いのに思考がある意味似ているな……。

「2、3着にしなさい」

「むー。これでも厳選したのにい」

綾乃は頬を膨らませて、元来た方へと帰っていった。まったく……。まだ1時間も経って無いのに疲れた。俺はあいにく服にあんまりこだわりの無いので、店をぶらつき始める。

ぶらつき始めて約10分。今度はまともな値段のジーンズを持ってきた瑠奈と、3着を更に厳選した綾乃がやって来た。会計は2万5千円ほど。会計を済ませると丁度昼飯タイムなので、ファーストフード店を探す。

「ここらへんファーストフード店無いね。もう動けない……」

「お腹へったよ。テレビー」

・・・

腹がへったから動けない。それは分かる。だが腹がへったのとテレビはどうしても結びつかん。

恐らくは腹が減りすぎて、平常心を保てなくなっているのだろうな。

「あつ、あつちにロツテ。アあるぞ」

「ほんとっ!?!」

×2

俺の言葉を聞くと、一気に元気になった綾乃と瑠奈は、その店へと向かって行った。微妙に高いんだよなあロツテ。ア……。

一人佇むわけにもいかないので、結局俺もその店へと入っていった。中に入って注文し、バーガーを受け取ると二階の席へ案内された。

そして俺は綾乃と瑠奈と真正面の位置に座る。

「たまには皆で出掛けるのも面白いね」

「まっただ」

「そういえば竜兄、あといくら位残ってるの？」

瑠奈にそう言われて、HP（残金）が気になった俺は財布を開いて確認する。

・・・あれ？

・・・。

最初の金は5万持ってきて来たんだよ。服とか3人分買わなきゃいけないと思って貯金を降ろして。んで服は2万5千円、バーガーに系1500円ほど使ったのだから残金は2万3500円のはず。だが俺の財布には1万3500円しか無い。落としたのか？

「なあ、1万円知らないか？」

財布から綾乃たちのほうを向き直した。

綾乃はジュースをストローで飲みながら頭にクエスチョンマークを浮かべている。なので瑠奈のほうを向くと、なんと偉大なる福沢諭吉さんの姿が。

「瑠奈、俺の財布から取ったのか？」

手を伸ばして取ろうとすると、すんでのところで札を引かれて掴めなかった。

「これを返して欲しかったら、私の言うこと一つ聞いてね。」

小悪魔のような笑顔で語ってくる。ってそんなことはどうでも良い。要するに金をとるかプライドをとるかだろ？ ならば答えは一つ。

「言うこと聞くから返して」

金のためならプライドなんかいらん。俺は資本主義なんだあ！

「……承諾するとは思わなかったよ」

「ん？ なんか言ったか？」

「う、ううん。べつつに」

瑠奈は一瞬慌てたがすぐにいつもの顔になって、俺に福沢諭吉さんを返してくれた。綾乃は今のやり取りが分からず、未だ頭にクエスチョンマークを出し続けている。

「なんの話なの？ お兄ちゃん」

「大人の会話さ」

半分ホントのことを、半分嘘を教えた。

ま、地元とは言えここはファーストフード店。俺がプライドを捨

てたことを聞いた客とはもう会わないから別に問題はないだろう。

俺と瑠奈と綾乃はバーガーを食べおわり、外へ出た。

第8話：キング・オブ・変人登場

今は4時限目の最中である。

俺はいつものように起床し、いつものように飯を食らい、いつものように出掛けた。なのに平和に学園生活は送れず、気分は最悪だ。その理由を紹介しようと思う。

「いつも屋上で食べてるからさ、たまには食堂で食べよう」

昼休み開始のチャイムがなる前に、綾乃がベランダから言ってきた。いろいろと突っ込みどころは満載だ。

「ああ、それは別に構わないぞ。だが綾乃、授業はどうした？
そしてなぜベランダから登場する？」

「授業は瑠奈姉が手帳を使って中止にして、ベランダから登場したのは近道だからだよ」

ふ、ふん。

どうやら綾乃も瑠奈と似たような行動をとるようになってきたようだ。つまり、俺にとっては最悪なパターンなわけだが。

とりあえず俺は綾乃を我が教室の中に入れ、二人で食堂へ向かった。

「竜也つてさ、超シスコンじゃね？」

妹絡みになると異常なまでの聴覚を持つ俺は一瞬で教室に戻り、変な発言をしたクラスメートBの頭に肘打ちをぶち込んだ。

「クラスメートBよ。俺はシスコンじゃない。奴らが超ブラコンなだけだ」

白目になって崩れゆくBを指差しながら言う。気分が少し晴れたので綾乃のところまで一瞬で戻り、再び食堂へ向かい始めた。

「どこ行つてたの？」

「ちよつと忘れ物をしてな」

「ふん。綾乃、超ブラコンじゃないよ」

いや、いつもくつついてくる奴はブラコン以外の何者でもないぞ。

「スーパーだもん」

・・・。英語に直しただけかよ。ブラコンを否定しろよ！

なんて心の叫びを全く聞かない綾乃は、階段をピョンピョン跳ねて降りて行つた。

「ちよつと待てー」

俺は一段抜かしで階段を降りた。食堂に着くと、既に食料強奪戦争は終結していた。が、床には無残にも死体（生徒）が数人転がっており、今までなにが起きていたのかを良く感じさせてくれる。迷

わず成仏してくれ……。

「竜兄、綾乃、こっちだよぉ」

俺と綾乃は、瑠奈が呼ぶ席に座った。ポジションはいつものように俺が二人の真正面。

「でも弁当を食堂で食うなんて、なんか微妙だな」

「場の雰囲気を変えようってね」

てね」と言われても、反応に困る。でも中と外じゃあ確かに雰囲気は変わるな。俺的には外のほうが気持ち良いが。

「んじゃ昼飯食うか」

「そうしょ」

俺の発言、待ってましたと言わんばかりに綾乃が弁当を取り出した。それに続いて俺と瑠奈もそれぞれのカバンから弁当を出す。

……。なんか嫌なデジャヴが蘇る。

「お兄ちゃんのお弁当の中身は？」

「これだ」

弁当を持ち上げて傾け、二人に見せる。

「卵焼きもらって良い？」

「良いぞ」

綾乃から箸が伸びて来て、俺の弁当から卵焼きを拉致する。それを見た瑠奈も、

「じゃあ私これっ」

「あ！ それは俺の好物なのに」

俺の好物であるサバの煮付け。奪還しようと箸を取り出した時にはもう遅く、煮付けは瑠奈の口へと消えていった……。

煮付けを食われたショックで放心状態になっていると、自分の弁当そっちのけで食べていく綾乃と瑠奈。やっとなショックから立ち直ると、俺の弁当は6割ほど食べられた。

余っていたのはご飯のみ。ふりかけをかけていたのに、綺麗に表面だけ食べられて白いご飯がのぞいている。

「お前らさあ、もうちょっと兄をいたわってくれ」

「へ？ お兄ちゃん、いたぶりたいの？」

「……M。変態」

・・・変態はお前だ瑠奈あ！

「『いたわる』だ『いたわる』。『いたぶる』じゃない」

「へえ」

少々下品に箸をくわえたままの綾乃が深く頷く。お前本当にそう

聞こえていたのか。将来が不安だ。

「変兄^{へんにい}、なにか飲み物買って来てー」

「分かった。が、変兄は止める」

俺は財布を後ろポケットに入れて立ち上がり、食堂の外にある自動販売機へ歩き出した。ちなみに変兄は、変態兄さんの略のはず。ふざけやがって。

自動販売機の前に立ち、3本お茶を買った時、

「竜^{たつ}ちゃん！」

首に華麗なるフライングクロスチョップを叩き込まれ、少し黄泉の国を垣間見た。

「なにすんですか凜先輩^{りん}！」

初登場がフライングクロスチョップとは……。

「フフ、だって竜ちゃんに最近会えなかったんだもの♪」

そう、この人こそ俺が美術部を辞めたい最大の理由。髪は腰あたりまで伸びてるロングヘアーで、顔は確かに美人の部類に入る。それは認める。だが、ウルトラ変人。

「そんな、竜ちゃん！ 才色兼備で容姿端麗で家庭的だなんてっ！」

凜先輩は自分で自分を抱きしめ、クネクネと器用に近づいてくる。てかそこまで誉めてないし。微妙にその動き気持ち悪いし。

とりあえずここに居ては身の破滅。自分の妄想世界に入ってしまった。っている先輩はほっておいて、俺は瑠奈たちが居る食堂へ再び入った。

「ほれ飲み物」

既に自分の弁当を完食して、話し合っている二人に渡す。

「なんか遅かったねお兄ちゃん」

「凜先輩に会っちゃったからな」

「ああ、キング オブ 変人の」

ほら、瑠奈に言われるほどの変人だ。

「まあ逃げて来たから大丈夫なんだがな」

そう言っ元の席に座る。

白いご飯しか残っていない弁当のふたを閉めてカバンにしまう。

「竜兄、今日は部活行くの？」

「凜先輩に見られた以上、いかなば社会的にヤバイ。だから行くよ」

「……頑張ってね」

綾乃と瑠奈が本当に心配している顔で言ってきた。それほどまでに要注意人物なのだ。

俺たちは気が重くなりながら食堂をあとにした。

第9話：ヌードデッサン！？

「竜ちゃんは部活久しぶりだよね」

「いろいろありましたからね」

俺は今凜先輩と部室でイスに座り、向かい合っている最中である。本当は先ほどまで帰る気まんまんで、綾乃達に見つかっていない秘密のルートから逃げようとしたんだ。

その場所は裏門近くにあるマンホールを降りて、しばらく歩いてから上がるというシステムだった。普通ならば絶対に見つかからないはずである。

だから俺は五時限目の授業は半分だけ受け、急病（嘘）で帰った。しかしそこは凜先輩。五時限目を丸々サボって俺の教室前で待ち伏せしてやがった。てか良いのか、三年生が授業サボって。

とりあえず見つかってしまったので、ついて行ったわけ。

「で、今日の部活内容はなんですか？」

「ミロのヴィーナスが見たいな」

ミロのヴィーナスかあ。でも俺は絵画のほうが好きなんだよね。つか活動内容というか個人の意見で決めてやるし。

「見たいのは分かりました。ですが美術館に行く金とかは無いですよ」

「ああそれなら大丈夫だよ」

ほう、珍しく部費を割いてくれるのか？

「竜ちゃんがヴィーナスみたいになれば良いんだから」

「お断りします！」

部費を出してくれるのかと期待した俺がバカだった。そして俺にヴィーナスになれたと？ まず性別が違うし、腕を切り離さなければならぬではないか！

「ちえつ、せつかく用意したのに……」

なんて良いながら先輩はあるアイテムをロッカーの中にしまった。そのアイテムの名は『セメダイン』だ。

・・・破天荒先輩め。

「ヴィーナスの件は無しと言う方向で話を進めますが、本当は何がしたいんです？」

「うーん、絵を描こう！」

簡単に決めるね……。

「もちろんモデルは竜ちゃんね」

「えー。嫌ですよ」

なんて言いながらもまんざらでは無い顔の俺。そのまま少しニヤニヤしていると、凜先輩が不可解な行動に出る。

「……なにやってんすか先輩」

「なにつて……。こういう場合はヌードが基本じゃない？」

いや、初耳です。

先輩は俺のシャツのボタンを外すところだった。危なかったあ。と安堵の息をついた瞬間、

「ふふ、観念せい」

バツ！

【竜也はシャツをひっぺがされた】

「うわっ、服返して下さいよ！」

思わずRPG風のナレーションをつけてしまった辺りに驚いたが、俺は最優先すべきシャツの奪回を試みる。

「きゃー、変態が私を襲おうとしてる」

「デカイ声で人聞きの悪いこと言わないで下さい！」

部室の外に誰もいませんように……。いたら我が破滅はもはや目前。それだけは嫌なので俺は通常の三倍速になり、一瞬の隙をついてシャツを取り返した。

「ああ、角も無いし赤くも無いのに三倍速になったー！」

一応的確な突っ込みをする先輩をよそに、俺はシャツを着た。お帰り、マイシャツ。

「竜ちゃん、どうしても嫌なの？」

「当たり前です」

今の俺は並大抵の事ではこの意志を変えんぞ。

すると凜先輩はそう、一言だけ呟くとうつむき始めた。こういう行動、こちら側は別に悪く無いのだが罪悪感に見舞われる。だがここで折れるわけにはいかない。

「じゃあ私が脱ぐね」

「……はい？　今なんて言いました？」

「だから竜ちゃんがモデルになってくれないなら私がやるしか無いでしょ？　だからよ」

なんかおかしくね？　その理由。つかそもそもヌードから離れてデッサンしないのか！？

なんて考えていると、凜先輩の真っ白な手わスカートのファスナーへと伸びて行く。

「ちょ、待って下さいよー！」

俺は凜先輩の腕を軽く掴んだ。……なんか惜しいことをした気がしなくもないのは何故なんだろう。世の男性の夢を破壊した、そんな気分でもある。不思議だね。

まあ先輩の行動を阻止したんだから良しとするか。すると先輩は、

「冗談はこれくらいにしようか」

と言ってファスナーから手を離れた。それを確認した後俺も手を解放した。

てか冗談ならやらないでほしい……。

「はあ、部活はなにをやるかって話が一向に進んでないんですが、もしかしてこのまま解散ですか？」

「このまま解散したら私の威厳が無いじゃない？ だから……」

凜先輩に威厳なんて大層なものは無いだろうと目を瞑って考えていると、なにやらまた上着に違和感が。まさかと思って目を開けた瞬間、

「一緒にヌードデッサンしよう」

また上着を脱がされた。しかも何故か凜先輩はブラウスのボタンを2、3個外して、『胸の白い悪魔』を覗かせている。くっ、胸の白い奴はバケモノか！？

この状態ではナレーターも出来やしないので、軽くぶつても取り返してやる！

そう思って前進した時、なんの因果か足がもつれて倒れこんだ。

「キャツ、もう、その気だったの？」

「違いますよ！ 誤解招く言い方止めて下さい！」

つーか今の状況、半裸の俺がブラウスのボタンを開けている凜先輩を押し倒している状況にしか見えない。幸いにも今日は他の部員は来てないので目撃者は誰もいないから助かった。そう思って体をどけようとした時、ドアと窓がフル稼働して、

「お兄ちゃん救出作せ〜ん」

「竜兄……なにやってんの！」

綾乃と瑠奈が飛び込んで来た。そして体をどかす前のこの状態を見た。もうばつちりと網膜に焼き付けているはず。実にヤバイ。特に瑠奈が。

綾乃はこちらを指差して口をパクパクさせているが、瑠奈はワナワナしている。『殺る気』だ。俺は急遽立ち上がって両手で今の出来事を否定する。

「待て、誤解だ！」

「沙蚕こかいは釣りのエサア！」

ああ、あのウネウネした気持ち悪い奴か。……誰が上手いことを言えと言った。俺が必死に弁解している中、凜先輩が火に油を注いだ。

「竜ちゃんがいきなりのしかかつて……」

「本当なのお兄ちゃん!？」

我に帰った綾乃が俺の腕を掴んで体を揺する。瑠奈は俺の頭を掴んで脳しんとうを起こすべく揺らす。

「お兄ちゃんは私のものなのー」

「いいえ、私の玩具よ!」

「竜兄は誰のでもな〜い!」

俺を囲みながら言い争う三人。ただ疑問が一つ。俺はそれを大声で叫ぶ。

「俺の人権を返せー!」

第10話：近所迷惑（俺を中心に）

「あー、ひどい目にあった……」

今俺はベッドにうつ伏せで寝ている。いつもならば慣れているので（慣れなくなかったけど）、横にならなければいけないことは無かった。では何故横になっているのかだ。

そう、ヌードデッサンがどうたらこうたらとデカい声で言い争う三人の声が廊下に響き渡り、一般生徒と教師陣の耳に入ってしまったらしい。そこに海斗がやって来て『既成事実発覚！』なんて言いながら写真を数枚撮って行きやがった。だから心身ともに極限まで疲労してしまったのだ。あ、因みに海斗は生徒会執行部と新聞部を掛け持ちでやってるから。

とにかく俺はもう起き上がる余力すら残っていない。今はただ体力回復にだけ集中したい。そう考えるといつつも邪魔が入る……。

「お兄ちゃん、元気になった？」

ドアを少しだけ開け、その隙間から綾乃がひょこつと顔を出した。俺は首だけそっちに向け、答える。

「大丈夫なように見えるか？」

今の俺は矢吹ジ。ーよりも真っ白な自信がある。それほど廃人化しているのだ。

「と言うわけで、ゆっくり寝かせてくれ」

そう言っ て綾乃とは反対側の壁を向いた。その後、パタンと静かにドアの閉まる音が聞こえた。どうやら出て行ったようだな。

「ていつ
っ」

「おぶはっ！」

背中に超衝撃を覚え、情けない声を出してしまった。背骨おかしくなりそ……。

「あーやーのー！ 出て行っ たと思っ たらニードロップかましやがっ てえ！」

寝っ ころがっ たまま怒る俺。うん、迫力無いね。その証拠に綾乃が俺の背中にまたがりながらケタケタ笑っ てやがる。てか乗っ かれていると非常に息苦しい。よし、肉を切らせて骨をたっ、あの一言で退場させよう。

「なあ綾乃。どけて」

「ヤゝ なぜか落ち着くんだもん」

俺は非常に落ち着かない。仕方ないか、言おう。

「綾乃、重い」

【竜也はザラキを唱えた！】

「ええっ！？」

【綾乃は息絶えた！】

おお、綾乃がどけてくれた。てか横に倒れた。……ちよつとやりすぎたかな？

「おい、大丈夫か？」

【返事がない。ただのしかばねのようだ】

……。さつきからこのナレーションうつとうしいな。このネタ通じる人はどの位いるのだろうか。そんなよく分からないコメントを残しつつ、俺は力を振り絞って立ち上がった。未だうずくまっている綾乃の肩を掴んで多少無理やり体を起こす。

そして俺の目に映った綾乃の右目には『減』、左目には『量』の文字が浮かび上がっていた。

「お兄ちゃん……。私今からダイエットする！」

ダイエット宣言発動！

「い、いや、さつきのは冗談なんだが」

「うん、それは分かってるよ。でも確かに最近体重増えちゃったし……」

「マナー違反を承知で聞こう。何kg増えたの？」

俺がそう言うと綾乃は俯いた。そしてゆっくりと口を開いて恥ずかしそうに言う。

「0、5 kg……」

・・・増えたって言わなくね？ まあ女の子には女の子の考え方があるのだろう。男子にとって些細な数値でも女の子にとっては重大な数値だしな。

「ふーん。頑張つてな」

薄情と思われるかもしれないが俺には関係ないことだし、もう夜だから大丈夫だろう。そう思って再びベッドに横になる。綾乃もこれ以上攻撃せずに部屋から出て行ったので、どうやら理解してくれたようだな。

横になってうつらうつらしてきた。やっと眠りにつけるという矢先、

「竜兄、走りに行くよー！」

「行くよー！」

ジャージ姿になって来た綾乃と瑠奈が部屋に突撃してきた。綾乃が白いジャージで、瑠奈は赤いジャージ。ま、どっちも俺のお古なんだけどね。

「いや、俺体重なんて気にしてないし……」

俺は昔からいくら食べても太らない体質だし、いつも平均的と言われているから気にしたこともない。てなわけで、俺は妹たちに反対の意見を言った。

すると綾乃がなにかを瑠奈に手渡した。手渡した物はなにか、それは机の上で充電していたはずのケータイだった。データに見られてマズいものは有るのだがロックフォルダに入れているので特に焦らないでいると、

「アクオ。ケータイ」

って良いながら稼働部分を曲げちゃいけないほうに力を入れ始めやがった。マズい、このままでは中のデータが全て消えてしまう！俺のフェイバリット画像が！

「分かった、ダイエットに付き合っよ」

「やった」

その言葉を聞いた綾乃と瑠奈はハイタッチをして喜んだ。俺は瑠奈の手から離れ、ゆっくりと床に落ちていくケータイをダブして受け止め安堵の息を吐く。

「じゃ外で待つてるから着替えて来てね」

そう言い残して綾乃たちは去っていった。はあ、なんで疲れている時に、しかもこんな夜にジョギングをしなくてはならないんだ。

ぶつくさ言いながらも黒いジャージを着込み、走り込み用の靴を持って外に出た。

「お待たへ」

「やっと来たー」

「じゃあ竜兄、ルール説明するね？」

柔軟体操をしていた綾乃たちだったが、俺の姿を確認するや否やこちらによつてきた。てかルールって？

「うん、ただ走るだけじゃつまらないじゃない？ だからちよつとしたゲームをしようと思ってさ」

瑠奈が期待で目を光らせ言ってくる。

「異論は無いが」

「（ニヤツ）じゃあルール言っね」

……。なんか見てはいけない笑顔を見てしまった気がする。

「ルールは簡単よ。まず私たちが本気で走る。しばらくしたら私が竜兄に合図を送るから、それから走り始めて私たちより先に目的地に付けば良いの」

「ふむ。ハンデ有りの徒競走みたいなもんだな。で、目的地は？」

「学校の正門だよー」

綾乃が瑠奈の肩に顎を乗せながら言う。

「了解した。だが、学校近くに行ってから知らせるなんてズルはするなよ」

「し、しないよ。アハハ……」

瑠奈が自分の後ろ頭に手を回しながら辺りを見渡す。つまりキョドっている。やる気だったな……。

「んじゃ早く始めようぜ」

そういうわけで瑠奈と綾乃は全力で走り始め、俺の視界から遠のいていく。

俺はというと、柔軟をしていないことに気づいたのでアキレス腱、屈伸、伸脚などの軽い運動をこなす。

綾乃たちは俺が本気で追いかけてくると思っているのだろう。だが俺は未だに眠いので、適当に走っていきこうと判断した。その時綾乃と瑠奈、二人の混じった声が俺の鼓膜を振動させる。

「「竜兄（お兄ちゃん）が襲ってくるー」」」

・・・

「なに变なこと言ってやがるお前らあ！」

俺は日本新記録でも超えられたのではないかというほど全力で走り出し、問題の二人を追いかけた。

俺は綾乃と瑠奈に三十秒ほどで追いついて軽く説教をする。もうこんなことするんじゃないぞ、と無駄とも取れる注意をしてその日は幕を閉じたのだった。

後日談であるが、綾乃と瑠奈の言葉を聞いた周りの住人に、俺だ
け超白い目で見られることになった。

ああ、早く次の家に行つて誤解を解かねば……。

第11話：ナイトミッション（前書き）

更新大幅に遅れて申し訳ありませんm（――）m
進路やらテストやらがかぶさっていたもので……。

これから応援よろしくお願いします！

第11話：ナイトミッション

今の時刻は夜中の10時半。なのにも関わらず俺は夜道を全力で駆け抜けている。もう力尽きても走る勢いだ。

なぜ走っているかだが、こんなことが先ほどおこったのだ。

俺が自室のベッドに寝ところがつて本を読んでいると、すぐ近くに置いていたケータイが鳴り響いた。

本から目を離さずに手探りでケータイを取り、メール内容を見る。

《お前の秘密をバラまかれなくては、今すぐ学校に来たまえ。

K & amp ; Rより》

・・・。

KとRはイニシャルで名前を伏せたのだろうが、とりあえず片割れは海斗だな。だって、このアドレスは海斗のPCだし。バレバレだ。

もう片割れのRは瑠奈かと思ったが奴は家にいるから違う。多分……。そのまま無視してケータイを閉じようとしたら添付ファイルに気づき、展開してみた。

「えーと。……………っ!」

俺は言葉を失った。

うん、なにが送られてきたかなんだけど、こないだのヌードデッサン事件で海斗に写真を撮られた時の場面だった。それだけならば特に気にしない写真なのだが、これは違う。

合成やら見分けにくいCGやらの技術をたくさん使われている。簡単に説明するとこんな感じ。

まず上半身裸の俺。そして左手には瑠奈が、右手には綾乃が。真正面には凜先輩がいる。さらに、瑠奈は顔を適度に赤められ、綾乃は多少嫌がっている顔、凜先輩に至ってはブラウスのボタンが完全に外れており、胸元の白い悪魔がはつきりと目撃できる。

つまり、【俺が綾乃と瑠奈と凜先輩を襲っている】という場面なわけだ。ねっ造もいいとこだ。真実は俺が奴らに押し倒され……ゴホゲホ！

「ちっ！　こんな画像バラまかれてたまるかよ！」

てなわけ。

下手すりゃ退学どころか警察沙汰になりかねない。だから走っているのさ。

そうこう説明しているうちに、学校へ着いた。

閉まっている門を乗り越え、誰もいない夜の校庭を突っ切っていると二人の影が目に入った。その二人に声をかける。

「約束通り来たぞ海斗」

「ちっ、来やがったか。せつかく数百枚プリントアウトしたのに」

海斗の手には十数cmのプリントが握られていた。もし俺が学校に来なければ、俺は間違いなく黄泉の国へ旅立っただろうな。てか海斗の右頬に赤い手形があるのは何故だろうか？

そんな疑問を頭に浮かべながらメールにRと書いてあった人へ声をかける。

「露出趣味ですか？ 凜先輩」

今この人は猫耳にスク水という訳の分からないスタイルで立っている。どこから突っ込むべきか悩む。

「ん〜ん。竜ちゃんの野生を確かめたくて」

残念ながら我が野獣はキチンと統率がとれているのだ。俺がそのまま二人を見ていると、凜先輩は隣にいる海斗の頬を指差した。

「他の男が野獣になったらこうなんだけどね」

野獣化したんだな海斗……。

「まあいいや。とりあえず要求通りに来たんだから、ネガをよこせ」

「それは出来……」

「それは出来ない相談よ！」

海斗が言い終わる前に凜先輩が口を挟んできた。

「もしや、他になにか企みが？」

怪しいものを見る目つきで海斗と凜先輩を見る。するとまた海斗が、

「その通…」

「その通りよ！」

またもや海斗が言い終わる前に凜先輩が言い放つ。さすがに2回言葉を阻止されたのは堪えたのか海斗は俺に背を向けてしゃがみ、見るからに落ち込みオーラを出しながら土を掘り始めた。

しかしそんなことは気にしない凜先輩（俺も）は話の続きを語りだした。

「次なる要求は、『平成のイエス・キリスト』になってちょうだい
よ」

「『平成のイエス・キリスト』？」

あいにく俺は宗教とかに大して知識が無いから適当なんだが、迫害やら軍隊やらを退けることが出来ながらも、最も信頼していた弟子の一人に裏切られてしまった可哀想な人だよな。

さて、どうやってそのキリストみたいになれと？

「十字架を持つてくるから磔に」

「全力でお断り致します」

この人なら本当にやりかねないから恐ろしい。

「とりあえずネガは返してもらいますよ」

俺はいまだに地面を掘り続けている海斗の肩に手を回し、身体検査をするようにパンパンと叩き始めた。

「……変なところ触るなよ」

「お前みたいな奴なんて触りたくもない」

俺は我慢しながら奴の全身を探す。だが、フィルムらしきものは見つからなかった。

「おい、ネガはどこにある」

多少焦りが混じった声で声を出す。すると海斗ではなく凜先輩が、

「ネガは部室にあるわよ」

そう言ってくれた。だが瑠奈と同等、いやもしかしたら上回るかもしれない嫌な笑みを浮かべている。

そして俺の第六感が告げている。これは《罨》だと！

しかし我が道に後退は無し。後退すれば校門やら職員室前やら人目がつく所にとんでもない写真が貼られてしまう。

「じゃあ部室に行ってきますから」

俺は踵を返し、一目散に部室へと向かった。部室の前に着き、これから先何が待ち受けているか分からないので息を整え始める。……なぜ学校内でこんな目にあわなくてはならないのか疑問ではあ

るが。

完全にいつもの呼吸速度になったのを確認し、部室の扉をあけて中に入った。

本当は明かりをつけたいのだが、もし周りの住民に目撃されて通報されてしまつては元も子もないので明かり無しの手探り状態でやらなくてはならない。

まあ闇に目が慣れてきたからある程度は判断できるようになってきたがな。

「お、目的の物はっけーん」

デッサン用の道具が入り乱れて置いてあるテーブルの上にあからさまな形で置いてあったネガをみつけた。そのネガを手に取り早々と部室を後にしようと反転した時、腹部になにかが突進してきた。俺は反転したというのもあり、耐えることもできずに後ろへ倒れた。そして後頭部を強打した。すげえ痛い……。

「えへへ」

突進してきた存在。それは皆の予想通りの存在である凜先輩だった。どうやらネガを取って安心した隙を狙うつもりだったようだ。

凜先輩は俺に覆い被さるようにして密着しているため、胸にやけに柔らかな感触を受ける。

まずい！ 我が野獣が暴れ出す！

「とりあえず離れて下さい！」

凜先輩の体を軽く横にずらし、開いた隙間から這い出る感じで出、野獣を鎮静化させる。……よし、落ち着け俺のビースト。

「ちえゝ、もうちょっとだったのに。」

「こっちは精神力を使い果たしましたよ……」

「（ふむふむ。竜ちゃんはこういう路線に弱い……と）」

「？ なにか言いました？」

細く白い親指と人差し指で顎を挟むように考えごとをしている凜先輩にいう。

「う、ううん気にしないで。それよりもう学校から出ましょ。この格好、結構恥ずかしいのよね」

なら最初から着るなよ。なんて口から出すことができない自分を呪いながら、俺と凜先輩の二人は学校を後にした。

そして翌日。

ネガも取り返したので安心してながら綾乃と瑠奈と登校していると、正門前に教師陣と生徒陣が群がっているのが目に入った。そして俺の姿を見たクラスメートBは、正門に貼ってある紙を破いて俺の前に持ってきた。

「おい天宮！ こんなことしてたのかお前！」

そいつは俺の目の前に紙を突き出しながら言った。そしてそれを見た綾乃と瑠奈が、

「っ！？ なにこれお兄ちゃん！」

「竜兄！ 納得のいく説明して！」

「う……そ、それはだな」

俺は明らかにやる気、いや殺る気を出している綾乃と瑠奈から離れようと後ずさりをする。

貼られていた紙の内容。それは《暗闇の部室内、凜先輩が仰向けの俺に乗っかっている》という際どい写真が掲載されていた。

俺は半ば拳動不審に陥りながらも逃げ道を探すために辺りを見渡す。すると、これ以上無いってくらい満面の笑みを浮かべた海斗を発見した。そして奴から放たれた一言。

「凜先輩の注文したタイミングによる赤外線撮影！ 我が新聞部は無敵なりい！」

それに触発されたのか、綾乃と瑠奈は『負けてられるかあ！』と口走りながら俺に攻撃を仕掛けてきた。

いつも通りの青空、いつも通りの白い雲を見上げながら、俺は叫んだ。

「俺に普通の学校生活はできないのかああー！」

後日談であるが、あの後俺と海斗と凜先輩は校長室に呼ばれ反省文を書かされた。

なんで俺まで……。涙が止まらないよ、お母さん。

第12話：部活ブレイ？

「こんにちはー」

俺は今のところ誰も居ないはずの部室の扉を開け、中に入っている。

え？ なぜ挨拶するかって？

うーん、職業病みたいなもんだよ。

「まったく凜先輩め。あんな写真を校門に貼り付けて……。ここはビシッと怒らねばなるまい」

・・・まあ無理だろうけどね。

どうもあの人のペースは皆を巻き込むからなあ。

カタッ

「ん？」

後ろのほうから音がしたので振り返ってみると少し湿っているハンカチらしきものを顔に押し当てられ――。

「ぐ………うっは………」

俺は意識を取り戻し、今自分がどこにいるのかを把握しようとした。

天井から察するにどうやら学校内にいるようだ。だが納得いかないうことが一つだけある。なぜか手足をベッドの四つの柱に紐で結ば

れているのだ。

ワケの分からない展開が進むなか、どうやら犯人らしき奴が奥から出てきた。

「ようこそ竜也君。我々のアジトへ」

そこには大仏の被り物をしている奴が立っていた。

・・・なんで大仏なんだよ。
もったかつこいい物にしとけよ。

「ふっ…、私が誰だか知りたいか？」

「俺をどうする気だ海斗」

「っ！？ い、いや俺は海斗ではない！」

ゴム製の大仏をグニャグニャ動かしながら両手をブンブン振り回して否定する。すげえ顔…。

「ネームプレートを見てもろ」

「あ……」

アホめ。

「くっ、バレちゃしょうがねえな」

海斗は大仏のてっぺんを掴み、勢い良くはがして顔を露呈する。

いつ見ても間抜けな顔だな。

「質問に答えよう。俺はある方々に依頼されたが故にお前を拉致及び監禁及び拘束及び、はだ……いや、これはとても俺の口からは言えないぜ」

な、なに！？ 海斗でも言えないなにかをされたのか俺！？
つか『ある方々』って誰……いや、考えるまでもないな。

「ふふ、目が覚めたようね」

きらりと不気味に光る黒い伊達眼鏡をかけ、スクール水着に身を包んだ人、

「竜に……じゃない、貴方の探している人物は私たちよ」

もはや廃れた文明、幻と化してしまったはずである昭和の名産ブルマに身を包んで顔の上半分を覆う白き仮面をしているやつ、

「ヤッホーお兄ちゃん」

周辺の男子学生憧れの的である我が高校の女子専用制服を改造し、かなり露出度が高いのを着ている奴が俺の死角である部屋の隅から出てきた。

そしてスク水とブルマは制服の発言によりかなり大慌てになり、拳動不審に陥った。

「はあ……。なにやってんだ凜先輩と瑠奈と綾乃は」

「あらら……バレバレ？」

全く悪そびれた様子の無いスク水が言った。声で分かるわ声で。

「ほぐらやっぱり綾乃のせいで発覚しちゃったじゃない。あれほどバレないようにしろっていったのに」

ブルマが制服に軽く怒る。

制服はケタケタ笑いながら怒られており、反省の意図は見いだせない。

「拉致監禁及び拘束の理由はいつたいなんですか？」

ベッドの上で大に寝ている俺はなるべく大事にしたいので、黒幕の凛先輩と瑠奈単刀直入に聞いてみた。

綾乃は何を思っているのか分からないが黒幕の二人とは真逆の位置に歩いていく。

歩いていく綾乃を目で追いつつ明解な説明を待つ俺に、

「お兄ちゃん、こつち見てー」

突如綾乃の声がしたので首を右から左へと移す。

俺はそこで時間が止まってしまったかのように硬直した。

「なんだこの際どい写真どもはぁ！」

俺の目線の先、04年PCが3台並んでおりそれぞれに最新プリンタが接続されている。

そして俺が叫んだ最大の理由は、デスクトップにデカデカと陣取っている3つの写真。

いつの間にか各PCの横に移動していた瑠奈と凜先輩が説明しました。

「竜兄これはね、爆睡していた時に撮ったやつだよ」

そう言っている瑠奈の右横にあるPCには、『仰向けに寝ている俺の体に座っている瑠奈』の写真が。

「今回の目的はこの写真を撮りたかったから。でも安心してお兄ちゃん。これは誰にも見せないから」

そう言っている綾乃の横にあるPCには俺の後頭部があり、その顔の先に綾乃の顔が密着しているのかいないのか見分けにくいという、『もしかしたら実の妹とキスをしているのかもしれない』という超えては行けない写真が。

「良い思い出になったわ」

にひひ、と笑っても決して下品に見えない容姿の凜先輩の横にあるPCには、『上半身裸の俺と胸の白い悪魔を出撃させた凜先輩が隣同士で寝ている』という写真が。

.....

瑠奈と綾乃のもヤバいことに変わりはないのだが、目をつぶろう。しかし、最後の凜先輩のは納得いかん！

「因みにこのアングルで撮ってほしいという依頼を快く引き受けてくれたのが海斗君よ」

瑠奈が指差す方向にいる海斗は『自分は何にも知りませんよ』と言わんばかりに目を泳がせている。

「説明はいいですから早くデスクトップから消して下さいよ!」

俺は必死になってこの写真の存在を消してくれるよう頼み込む。

「でも竜ちゃん、今でこそ嫌がってるけど写真撮影の時、体のほうは正直だったわよん」

わーわーわー!! この話はいい子の皆も見てるんだから!

もう少して禁止ワードに突っ込んだじゃうんだから!

っーか俺の体のバカあ!

腕と足を繋いでいる紐、いや鎖をガチャガチャ揺らしながら暴れる俺の肩にポンと海斗の手が置かれ、一言ささやく。

「ま……、これも人生だと思って割り切れや」

.....。

ブチッ

「? 今変な音しなかった?」

ブルマ瑠奈が制服綾乃に言う。

「うーん、お兄ちゃんのほうから何か嫌な気配はするんだけどにやあ」

制服綾乃は多少オドオドしながら後退していく。

「め、珍しくマジギレモードになっちゃったわね……」

綾乃の行動を見た凜先輩も真似して後退していく。

そして空気を今一つ読めていない海斗は――。

「ばっ、バカな！　これがスーパーサイヤじ…ぶひゃあ！」

人外な力によって鎖を引きちぎった俺はそのまま海斗を力一杯ぶっ飛ばし、体を自由にする。

「に、逃げなきゃ」×3

綾乃、瑠奈、凜先輩は一目散に部屋から飛び出していき、いなくなつた。

「さて……お仕置きの時間だな海斗」

「な、なんで俺だけ……」

「そこに海斗がいるからさ」　いくぞお！　四十八手その一！

「ギ、ギブアー―ッブ！」

海斗の必死の叫びを耳にしつつも、俺の怒りの矛先は変わらない。

よし、次は四十八手その二だな」

後日談であるが、綾乃、瑠奈、凜先輩をまとめて補導し、反省文を書かせてPC内のデータを消去させた。
いつまでこの仁義無き闘いは続くんだ……。

第13話：瑠奈ちゃんが苦手になりそうです（by海斗）

「おっす竜也」

「おっす変態」

今日は以前みたいな事件は起こらず、平和に学校へ入れた。普通の生徒ならば飽き飽きした日常も、今の俺にとってはまさにオアシス。

海斗、もとい変態にも挨拶したことだし自分の席に座る。
痛い。

「……………」

「どうした竜也」

イスに座ったはずの俺が急に立ち上がり、自分のイスを見下げていることに違和感を覚えた海斗が尋ねてくる。

「これをやったのは貴様か」

「だからなにを」

俺を超不審人物のような目つきで見ている海斗を手招きし、我がイスを見せた。

「おお………すげえな」

イスがなぜ痛いのか。それは刺さらない程度にまで尖らせた木片

のカケラがあつたからだ。

「机の中にはこんなものまであつたぞ」

俺はゴソゴソと机の中に手を入れ、見つけたものを取り出す。

「……竜也、そんな趣味あつたのか？」

「違つっ！」

取り出したものを机の上に投げ、全てを否定する。

取り出したもの。それは見るからに使い込まれた『縄』と、こんな太いのあるのかと思わずにはいられない『ろうそく』である。

このシリーズを集めるとエスエ…ごほん。自主規制します。

「このシリーズはまるでエス…」

「それ以上言うなあ！」

クロスチョップしながら海斗の口を塞ぎ、強制的に言葉を飲ませる。

「い、いきなりクロスチョップするとは」

「お前が危ないセリフを言うからだ」

パンパンと服についた埃を払いながら立ち上がり、このシリーズを片付け始める。

「まったく誰だよこんなことする奴…」

「おい天宮」

「なんだクラスメートA」

「客だ」

ろうそくを縄で縛ってゴミ箱に捨てようとしていると、クラスメートAが話しかけてきた。客？

「竜兄」

客。それは事情を知らない者が見たら絶対に心ときめく笑顔をしている瑠奈だった。場所はいつものベランダだが。俺は窓に近寄り鍵を開けて窓も開ける。

「なんか用か瑠奈」

「9日10日」
いっこのかやうか

懐かしいギャグだな。

「アホ」

それだけ言っで窓をしめようとすると、瑠奈の目がある一点で動かなくなったのに気付いて手を止める。

まずい。非常にまずい。

イスの上にある木片も説明不能だが、今まさに俺が持っている縄とろうそくは怪しすぎる。

「竜兄、あれ……」

「え、あ、あれはだな」

俺の足りない頭が、海斗の私物だ。そう言おうと口を開けた瞬間、

「気に入ってくれた？」

「へ？」

またもやニコツと笑う瑠奈。

考える。今のことはを整理し理解するとだ。

「もしかこの不思議アイテムの類は……」

「私のだよっ」

『じゃねえ。いくら親が不在がちとはいえ、お兄ちゃんはその風で育てた記憶はありませんよ？ たぶん。』

俺は過去を振り返ってどこで瑠奈が道を踏み外したのかを目を閉じて考える。

「あ、ちなみに協力者もいるよ。ほら、その竜兄のイスに木片があるでしょ？」

そう言われて我がイスを再び見直す。うむ、平和な教室に変な雰囲気醸し出している。あれほどの強大な負のオーラは初めてだ。とりあえずいつまでも見てると変なので瑠奈と向き合う。

「あれを作ったのは……」

瑠奈が先を言おうとすると、俺は後ろからくる視線を感じる。振り向いてみる。すると一人の見慣れた人がいそいそと俺のイスに新たな木片を足していく。

「え〜と、なにしてるんだ綾乃」

「木片の補充だよ」

それがどうかした？ とでも言いたげに首を傾げる綾乃。

「つまりだ。この一連の騒ぎは」

窓際に手を置き、ヒョイと乗り越えて教室に入ってきた瑠奈が言う。

「そ〜 時間潰しもかねてね」

こ、こいつら…。お前らのせいで俺に『蒼香学園の恥さらし』って称号がついたんだぞ。一番メジャーな称号は『M竜也』だがな。ふっ、我ながら死にたくなるぜ。

肩を下ろし、俯いてダークな状態に入っていると背中を海斗にポンと叩かれた。

「どうやら俺にも好敵手が出来たようだな」

「……頼む。張り合わんでくれ」

力無い声で反論した俺は木片を払いのけて机に突っ伏そうとしたが、木片はびくともしない。気分を落ち着かせてもう一度試みる。動かない。それどころか摘んで持ち上げることすら出来た。

「あ、途中で取れると面倒だからアロナルファ〜で固定したよ」

・・・・・・。

「直してくれ」

「えー…」

真顔のまま綾乃に近づき、少しだけ笑う。もちろん敵意てんこ盛り。

「な・お・す・よ・な？」

「う、うん。わひゃった〜」

両手をぶんぶん振り回し、痛みに耐えようとする綾乃。なぜかと言つと頬を俺が引つ張っているからだ。

手を離し、綾乃を俺のイスのところへ運ぶ。

「あう〜痛いよ〜」

綾乃は赤くなった頬をさすりながら作業に取りかかった。自業自得だな。

「さて、じゃあこの不思議アイテムは」

縄とろうそくを持ち主である瑠奈に渡そうとする。

瑠奈は俺ではなく海斗に視線を動かし、

「持ち主である海斗君に返そうね」

「ん？ この調教アイテムはお前のじゃないのか？」

浮かんできた疑問を言う。それでも瑠奈は俺に視線を動かさずに海斗を見つめる。

「いやそれは瑠奈ちゃんが俺のPCでネット購入を」

海斗が否定しようとする、瑠奈は胸ポケットから手帳を取り出してパラパラとめくっていく。

俺も海斗もそれを黙って見ていると、何かを発見した瑠奈は教室中に響き渡る声を上げる。

「海斗君は隣に住んでいる主婦神谷さん（32）と…」

「俺の私物です！」

瑠奈が言い終わる前に顔面汗だらけの海斗が止めた。

……。

主婦となにがあつた海斗おお！

「というわけで竜兄、この調教アイテムは海斗君のだから」

そついうと瑠奈は満面の笑みで教室から去っていった。相変わらずわけの分からん奴だ。

「んじゃこれの処理は任せたぞ」

「あ、ああ……」

半ば放心状態の海斗にアイテムを手渡し、まだ作業を進めている綾乃のもとへ。

「ほれ、もうH R始まるから戻れ」

「でもまだ全部取り除いてないよ？」

「あとは俺やつから。早く教室戻れ」

「ありがとー！」

すると綾乃は何を思ったのか、にぱ〜と笑いながら抱きついてきた。俺の胸部に当たっている柔らかい二つの感触は……あれに間違いない。

「い、いいから離れろ！」

「あはは、じゃまたあとでね〜」

力ずくで離れた綾乃も笑いながら教室から去っていった。

ふう。疲れた。残された俺は自分のイスをまだ来ていないクラスメートBの席と交換した。すまんB。

さて、最後の仕上げだ。さっき綾乃が俺に抱きついてきた時に耳に入った言葉、『シスコン イズ 竜也』って言ったクラスメートを探さなくてはな。

後日談。

『シスコン イズ 竜也』と言ったクラスメイトに復讐をした俺は廃人と化している海斗に『主婦がどうした？』と聞いたら、ビクツと体を動かしたあと奇声を上げながら走り去っていった。
一体、なにがあっただ……。

第14話：竜也vs催眠術and黒魔術

以前に言ったと思うが、俺は意外と読書が好きだ。だから自分の部屋の本棚には小説が結構ギッシリつまっている。

瑠奈や綾乃が暇すぎて死にそうになると俺の部屋から小説を10冊ばかり抜きとって読むこともあり、奴らもだんだんと読書をする時間が増えていつている。

兄として、そして一人の男としてそれは嬉しい。だが、今熱中して読んでいる本が微妙。

「なあ綾乃」

「なに？ お兄ちゃん」

ソファーに座っている俺。そして俺の膝を枕にして本を見ている綾乃がもぞもぞと目を向けてくる。

膝枕は昔、おふくろがいないと泣き叫んでた綾乃を寝かせるためにした思い出がある。その名残という感じで今でもたまにこんなスタイルになる。

「なにを熱心に読んでんだ？」

綾乃が持っているのは黒いブックカバーに包まれた本。

誰かが本を見ていると、なにを読んでいるか気になるタイプなんだ俺。

「『これであなとも縛り役！ 中学館』ってやつだよ」

聞かなきゃ良かった……。つーかそんな本を読んでいるのかお前

は。

「もうちょっとタメになる本を読め」

明らかに高校生が読んで良いレベルじゃないぞ。

俺は綾乃から本を奪い、後ろに立っていた奴に渡した。ん？ 後ろ？

「なにこれ」

「あ」

後ろにいたのは皆さんの予想通り、瑠奈でした。最悪な奴に渡しちゃったな……。

「竜兄こういうのに手を出すからよからぬ噂がたつんだよ」

「そうだそうだ」

2対1になって優勢になった綾乃は急に勢いに乗り言ってくる。……よからぬ噂の4割方はお前ら姉妹による猛攻のせいだが。因みに残り6割は凜先輩になりますのであしからず。

「あれ？ 瑠奈姉はなに読もうとしてたの？」

ムクリと起きた綾乃はきょとした目で瑠奈の手をみる。俺もつられて見てみると、縛り役以外になにか一冊の本を持っている。

「ああこれね。変人竜兄と違って優秀な私は」

変人で悪かったな。瑠奈は縛り本を床に置き、最初から持っていた本を見せびらかすように表紙を向けてきた。そこにはこう書いてあった。

「『ザ・催眠術』よ」

「ふーん」

軽く受け流した俺は先ほどまで読んでいた小説を開いた。

そして綾乃の頭に足を占拠されていたからか、右足が痺れて痛い。ぶらぶら動かして気を紛らわしていると、

「反応うすーい！ さては出来ないと思ってるでしょ。よし、腕前を見せあげる」

瑠奈はそう言っ腕まくりをする。綾乃は楽しそうに五円玉に糸を通し結び始める。五円玉を左右に動かすつてのは有名すぎるな。ゆえに催眠術がかからないという自信も出るってわけだ。

俺の中でなにか起因になったか分からないがやけに自信が出始め、瑠奈の催眠術ゴツコにのってやることにした。

本にしおりを挟んで脇に置き、綾乃に紐付き五円玉を手渡された瑠奈は俺の目線に持つてくる。

「この五円玉をよく見ててね。見失ったら負けだよ」

「……なんだよ負けって」

意味の分からないことを言ってきつつも、瑠奈の目はやけに真剣。綾乃は俺のすぐ横で口を半開きにしてこの場を眺めている。

しょうがねえなあ。こいつらの期待にそって、かかったふりしてやんよ。

「あなたはだんだん眠くなる眠くなる」

で、典型的すぎる。

「そしてもう二度と目覚めなくなる」

死ぬのか俺！？

「なあ、その遠回しに俺を殺そうとするのは止めてくれ」

その言葉を聞いて驚く綾乃。なぜお前が驚く。

「ええー。保険金を受け取れなくなっちゃうじゃない！」

・・・。

妹が信じられなくなりそうですお母さん。まさか実の妹にそんなことを言われるとは夢にも思いませんでしたよ。瑠奈ならともかく。

「ダメだよ綾乃。半分は私のなんだから」

人が信じられなくなりそうですママン。

「な、なあ。もう少し難易度落としたらどうだ？ 犯罪ごとは無しで」

そうしないと俺が精神崩壊を起こしてしまう。

しかし犯罪ごとは無し、という条件を出したら瑠奈が困惑の表情

になり、『うゝん』と考えだしてしまった。どうやらその関係のこ
としか頭に無かったようです。

これ以上付き合っても仕方ないので俺は自分の家事分担であ
る洗濯物を干そうと立ち上がった。

「ちょっと待つて竜兄。最後にこれだけやらせて」

「……最後だな？　なら良いぞ」

最後という単語が出たので、俺はしぶしぶとソファに座り直し
た。

「よーし。綾乃、キッチンからろうそく二本持ってきて」

「わかったー」

瑠奈の指示をつけた綾乃はキッチンのほうへと去っていった。ま
さかとは思うが、ろうそくつて先日『あれ』じゃないだろうな。
心配で挙動不審に陥っていると、何やら瑠奈も部屋に去っていっ
た。これは解放されたのかな？

まああと少しだけ待つてみるとするか。

しおりを抜き取り小説の続きを読み始めた俺は、二人が戻って
くるまでゆったりと過ごす。一回だけさつきキッチンからパリーン
つて聞こえたが、気にしない。

綾乃と瑠奈がいなくなってから15分が経ち、ようやく二人が戻
ってきた。

「お待たせ」

「うう… やつと見つかった」

うちのろうそくは使用頻度少ないから毎年どこにしまったかで迷うんだよな。どうやら綾乃はずっと探していたらしい。しかし問題は瑠奈の格好。体全体がすっぽりと入る黒いローブを身につけている。

「なにをする気だ瑠奈」

「黒魔術」

なんの恥ずかしげもなく答えたよこいつ。

「黒魔術ねえ。で、なにをするんだ？」

「それはまだ教えられるいよ」

「そうか。まあ洗濯物も干したいから早くしてくれよ」

少々投げやりな応答をする。だって科学の時代に魔術なんだもん。催眠術のほうはまだ説得力があるよ。

足の痺れも無くなったので立ち上がって瑠奈の黒魔術をくらうことにした。

「じゃあいつくよー」

そう言つと瑠奈は綾乃からろうそくをもらい火をつけた。そのろうそくを前後一列に並べ順に動かしていく。

さっきの催眠術と変わらないじゃないか、そう言おうとした時、急に膝の力が抜けてドスンとソファーに座り込んでしまった。

「な…っ」

「嘘…… かつちやった」

「なんか言ったか？」

「にや、にやんでもないよ」

一度そつばを向いた瑠奈だがすぐに視線を戻してきて黒魔術を再開する。

この黒魔術、さっきの催眠術の強化版のようだな。 ってことは次かけるのは。

「竜兄はだんだん眠くなる眠くなる」

やっぱり。 しかしこんな定番なものに引っかかっては兄としての沽券こけんに関わる。ここはグッと我慢を……。

そこで俺の記憶は途切れた。

「ん……ここは？」

記憶が戻った俺は仰向けに寝かされていた。天井と視界に入る家具から察するに、ここは俺の部屋だ。俺は右腕で重い瞼まぶたをこすり、

ある違和感を感じた。

違和感その一。

着替えた記憶は無いというのに服装が違う。今着ているのはいつも寝る時のスタイルだ。しかし上半身裸。

違和感その二。

俺は自分のベッドにいるんだ。しかし俺の腹部に左右から生き物独特の暖かさが伝わってくる。そして両腕に感じる2つの柔らかい感触。……いまのは聞き流して欲しい。

俺は勇気を振り絞って布団を剥ぎ、叫ぶ。

「俺にいったい何をしたあ！」

所狭しという感じで寝ていた綾乃と瑠奈が寝ぼけ眼で起きた。

「おにいちゃん、にーはお……」

ダメだ。綾乃は完全に睡眠モードに入ってる。

「ああ竜兄……。大丈夫、着替えさせて一緒に寝てただけだから……」

大きな欠伸をしながら瑠奈が答える。着替えさせて一緒に寝てただけって、兄としては大問題なんだがな。

「とにかく、俺は下のソファで寝るからな」

そう言ったあと、瑠奈が火のついていないろっそくを取り出し、

残り香らしきものを俺に嗅がせ――。

「竜兄、朝だよー」

「お兄ちゃん遅刻するよぉ！」

綾乃と瑠奈の声が下から届き、それに返事する。

「分かってるよ！」

今の時刻は朝八時。俺は何故だか知らんが寝坊してしまつて大慌て中だ。忘れ物は無いかどうかチェックし、カバンを持つ。

学校関係ではないが、なにか大事なことを忘れている気がしてならない。うーん、まいっか！

さて、用意も出来たし学校行かなきゃな」

登校中、会話中心編。

「なあ綾乃。俺昨日催眠術やら怪しいことを受けていた気がするんだが結果を忘れたんだよ。どうなったんだっけ？」

「え、ええつとお」

「なぜ口ごもる」

「ほら竜兄、遅刻しそうなんだから走る走る！」

「分かった分かった」

俺は走り出して一番前を駆け抜ける。

「（人間、知らないほうが良いこともあるんだよ、竜兄♪）」

……なんか忘れちゃいけない嫌なことがあった気がするんだよなあ。

第15話：初日の厄日

今の時刻は昼の一時。俺と綾乃はリビングのソファに座り、真正面に向き合っている。

「なあ、もっと開いてくれないと見えないんだけど」

「でも恥ずかしいよお兄ちゃん」

「昔は良く親に隠れて見せ合ってたじゃん」

「でも、もうお兄ちゃんも私も高校生なんだよ？ それに私まだ制服だし……」

「制服だからこそ燃えるんじゃないか。言わば正装だぞ」

「それはそうだけど……まだお昼だよ？ こういつのは夜じゃない」

「確かに夜のほうが雰囲気は出るが、俺は昼のほうが好きだし」

「でも……」

「ああもうじれったい奴だな！ 俺が開くよ」

「待つて待つて。開かないでえ！ 本当に見えちゃう！」

「もう止められないんだ」

「ああんっ！」

俺は綾乃に向かって手を伸ばして開き、正直な感想を述べた。

「……前と全然変わらんのな」

「……頑張ったんだからね」

こんな極々平凡な話をしていると、なにやら変な顔をした者が一人来た。

「……なんの会話してんのよ竜兄と綾乃」

俺は手に持っているものを開く。

「夏休み恒例の成績見せ合いの話だ。なんか変だったか？」

成績表をテーブルの上に置き、瑠奈の顔をみる。因みに変わっていないのは綾乃の家庭科の成績のことだ。

「ここに今録音したのあるから聞いてみる？」

そう言いながら瑠奈は右手に持っているボイスレコーダーの再生ボタンを押した。ポチッ。

俺は両手両膝をフローリングに密着させ、四つん這いになって落ち込んでいる。

「……………」

「どうしたのお兄ちゃん？」

「竜兄はね、自分が犯した罪にとらわれているの」

今回は言い換えせねえ。

いや、いつまでも落ち込んでいると名誉返上の機会が無くなってしまふ。それだけは避けねば！

「名誉は挽回だよお兄ちゃん」

「返上したら意味ないでしょ。まったく、それだから私や綾乃に成績追いつけないのよ」

「お前らも心読めんだな……」

「普段は読めないよ」

手をヒラヒラと左右に振って否定する瑠奈。頼む。俺をイジめるのは良いがプライバシーは守ってくれ。……誰だ今『M』って言ったのは。

さて話をかえて。皆さんの予想通り綾乃の成績には5が溢れかえってましたよ。ん？ 瑠奈の成績はどの位？

「そっぴや瑠奈。お前の成績は？」

「こんな感じだよ愚兄」

愚兄は止めて。

えーと、5がひい、ふう、みい……。うん。成績の話は止めようか。

成績の話は置いて、我が校『蒼香学園』は本日付けより夏休みに突入する。期間は1ヶ月弱といったところか。宿題の量は他校に比べると少なく、周りの高校から毎年羨ましがられる。

つまり、数少ない宿題を終わらせれば自由の身というわけだ。部活を除いて。

「じゃあ竜兄、生物教えて」

突然声をかけられたので瑠奈のほうを向くと、いつ着替えたのかワンピースになっていて麦茶を3つテーブルに並べ教科書を置いていた。綾乃はノースリーブ。

二人とも夏真っ盛りという格好になっていた。

「……お前ら俺が教えるまでも無いだろ」

「お兄ちゃんと一緒に勉強したいんだもん」

「ほら、可愛い妹が頼んでるんだから私たちに勉強を教えてよ」

「性格悪いくせに」

「なんか言った？」

自分の耳にギリギリ届く声で言ったのに、奴の耳には聞こえていたようだ。

ギラッという音がまさに似合うような目つきで俺を睨んだ。怖え。

「いえ、なんでもありませんよマイ妹たち」

「むー。いつになったら勉強始まるの？」

つまんなさそうにペンを見つめていた綾乃の言葉で俺と瑠奈に流れた殺伐とした雰囲気は断ち切られた。

「よし、じゃ俺も自分のをやりながら教えるよ」

ということ俺は自分のカバンに成績表をしまい、ついでにやりかけの数学Bを取り出してテーブルに置いた。

「ところでお前らは何と何の教科の宿題をやるんだ？」

「私は生物。因みに生殖が範囲」

と瑠奈。

「私が保健だよ。範囲は欲求不満について」と綾乃。

・・・。

なにこの狙ったような教科は。そして範囲は。てか保健に宿題なんて無いだろ普通。

「これ提出するの忘れちゃったの。だからだよ」

「あそ……。まあ悩んでてもしゃあない。やるぞ」

俺は筆箱からペンを取り出し、憎き数学に取りかかった。

すると綾乃は瑠奈に小声で話しかける。

「なんでお兄ちゃん悩むの？」

「うーん、若さゆえかな。ま、綾乃にはまだ早いよ」

「？」

首を傾げて悩む綾乃。いちいち構ってはいられないので左腕で視界を覆い、二人を見れないような状態にした。うむ、我ながらナイス名案。

「ねえ竜に……。むう」

瑠奈が何かを言おうとして止めた。それを気にしないで真っ白ノートとにらめっこしていると腕を弾かれた。

「喚んでるんだからこっち向いてよ」

「召喚するみたいな言い方もよせ。てか恥ずかしくないのかお前は」

「なにが」

「年頃の女の子が無防備に上体を出してくるんじゃない」

そう、こいつは両腕をテーブルについた状態で俺と話している。しかもワンピースだから胸元に目線が……。いかんいかん。人間を取り戻せ俺。

「ねえお兄ちゃん、これはなに？」

「ん？ どれど……っ!？」

瑠奈から強制的に目線をずらしほつと一息ついて綾乃をみると、こいつの服がなぜか乱れてやがる。

「教科書に書いてあるだろ」

「またもや強制的に数学のノートへ視線をずらす。ふう、もうちょっともってくれよマイサン。」

「ねえ、話聞してるの竜兄!」

「やっぱり教科書に載ってないよ。教えてお兄ちゃん」

「今度は二人いつぺんに襲……じゃなく教わりに来ました。さてここで問題。俺はこのまま無事に過ごせることが出来るでしょうか、出来ないでしょうか。」

「おゝい愚兄」

「ヘルプミ……」

「……俺はもちろん出来ないと思うよ。はあ。」

第16話：クソ兄貴、再誕（前書き）

今回は少し短いです……。ごめんなさい

第16話：クソ兄貴、再誕

「し、死ぬかと思った……」

否。何回死のうと思ったことが。

カバン片手にゾンビさながら歩いていく。事情を知らない者が見たら間違いないく避けて通るだろう。知らない奴はいないだろうが。

校門あたりまで行くと暇そうにしていた一人の女の子が満面の笑みになって走って来た。そう、帰宅部所属の変態シスター瑠奈だ。

「……なんか悪口言った？」

「いや別に」

やはり勘鋭いなこいつ。侮りがたし。

「つーかなんでお前ここにいるんだよ」

「だって家にいたら綾乃のご飯食べないといけないんだもん」

納得。だが、

「帰らないと帰らないで問題ありだからなあ」

「地獄まで 二人で行こう 天宮家」

「……不吉な俳句作るな」

俺と瑠奈は並んで帰ることにした。

帰る途中、俺の顔をまじまじと見ていた瑠奈は口を開く。

「なんでそんな性……じゃなくて生気無いの？」

・・・今不適切発言聞こえなかった？ 気のせい？ なら良いんだけど。

「思い出したくもない」

そう、思い出したくない。

部室入ると同時に凜先輩に制服を剥ぎ取られたとか、それを海斗が改造連写付きデジカメで撮影したとか、さらにその写真を凜先輩が買い取ったとか、それから後輩の目が軽蔑になったりとか、e t c……。

・・・マジで鬱だ。死のう。

「にしても凄いよね」

ふと瑠奈の持っている一枚の写真で自害の道は閉ざされた。

「貴様……それをどこで入手した」

「凜先輩に貰っちゃった」

「返せ」

「やっだよっ」

瑠奈は写真を高々と上げ、走っていった。一瞬遅れた俺だが、すぐに追いかける。あれだけはマズい。本気で追う！

あの写真。合成やらCGを使ったものなんだ。え？ 前と同じネタ？ 違う！

あれは『上半身裸の俺と海斗が抱き合ってる』という禁断の一枚だ。海斗は自分が犯してしまった行為で精神崩壊を起こしてしまっただけだ。

足の筋肉が崩壊するような気持ちで追うも、差は一向に縮まらない。瑠奈の逃げ足は自他共に認める俊足なのだ。

「竜兄、くっえ」

楽しそうに。本当に楽しそうに瑠奈は写真を紙飛行機にして大空へと飛ばした。

「くっ！」

ジャンプして紙飛行機を捕ろうとするが、出来なかった。紙飛行機はゆうゆうと風に乗り、小さくなっていく。

俺、ここまでの屈辱は初めてであります大佐……。

「まっ、元気出さない」

「誰のせいだよ」

俺は目が熱くなるのを感じた。涙じゃないよ、汗だよこれは。ぐすっ。

それから俺は瑠奈を攻撃しながら家へ帰った。

家へと入り、自分の部屋に行くために階段を上がる。二階に部屋がある瑠奈もまた然り。

俺は部屋の扉を勢い良く開け放った。

「フハハハハ！ ソロモンよ私は帰」

ピシヤ。

勢い良く閉めた。

「なあ瑠奈」

「……今のつてもしかして」

「うん、カスだね」

同意だ。カスと言われた存在。それは超シスコンであり、俺と綾乃の血の繋がった兄貴である。

そうか、夏休みだから帰って来たんだな。

「いきなり閉める奴があるかつ！」

スパァン！ と良い音を立てながらクソ兄貴が顔を出してきた。

身長は186cm、体重73kgの短髪。下手したら水。に見られる容姿だ。

「じゃ竜兄、私と綾乃は出掛けてくるね」

そう言って瑠奈は反転し、下にいる綾乃のもとへ。
残ったのは兄貴と俺だけ。

「むう。久しぶりに会ったというのに、恥ずかしがり屋さんめ。あとでがっちり抱擁してやろう」

止める。あんな妹でも死なせたくないし。

「つーかなんで俺の部屋にいるんだ」

「ふっ、知れたこと！ お前秘蔵の。。。本を奪いにきただけ！」

「ざけんなあ！」

俺の拳が兄貴の右頬を变形させる。

兄貴は体を捻りながらその場に倒れこんだ。

「ふっ……。我が生涯に一片の悔い無し」

あー。こんなマニアクな奴だけど、よろしく頼むよ。
今日は疲れたからこの辺で……。

「竜也は人妻が…ぬぐおっ！」

俺は兄貴の腹を踏みつけた。

俺はお前を兄貴なんて認めねえっ！

第17話：デッド・オア・アライブ（前書き）

もうネタが尽き……いやいや！ 執筆時間があまりなかったもので
久しぶりの更新です。

待っていた読者の皆様（いるのか？）、すいませんでした（謝

第17話：デッド・オア・アライブ

さて、兄貴が帰ってきてから俺は安楽という安楽を味わっていない。

朝七時、気持ちよく寝ている我が家に『ドナドナ』が大音量でながれた。やべえ、すぐ死にたくなる。

俺は布団をはねのけて部屋から飛び出し、兄貴の部屋の前で扉を叩く。

「おい兄貴、朝っぱらからうるせえっつもの！」
「なにを言うかつ！」

兄貴が扉をぶち壊さんかのようにフルスイングして開け放つ。俺はぶつかりそうになったがなんとか避け、真っ向からぶつかり合う。

「このドナドナは売られていく子牛に感情移入し、人間本来の喜怒哀楽の一部を取り戻させる素晴らしい作品ではないか」
「朝っぱらから鬱になるじゃねえか！」

俺はわざと加減して兄貴の顔面めがけて拳を動かした。
それをフェイントだと知らない兄貴は勝ち誇ったような笑みを浮かべる。あ、本気で殴りたいかも。

「見えるっ！」
「当たり前だ！」

兄貴はわざわざ某名セリフをはいて俺の拳を避ける。が、俺には二重の策がある。

「今だ瑠奈！」

「おっけえ！」

廊下の角にある自分の部屋から今か今かとうずうずしていたであろう瑠奈を呼ぶ。実は昨日の夜、俺と瑠奈が兄貴を懲らしめるミッションを計画していたのだ。

え、綾乃はどうしたって？

ああ本当ならあいつもミッションの一角だったんだが、テーブルに顎乗つけて五分もしないうちに寝ちまったんだ。頬をつねろうが旋毛つむしを突つつこうが、瑠奈がくすぐろうが胸のサイズを測ろうが全く起きなかった。

全く、知らぬ間にあんな成長して……じゃない、あんなに爆睡してると思わなかった。

出番が来た瑠奈は駆け出し、軽やかにジャンプする。片足を軸に横向に回転しながら突っ込む。

てかミニス力でそんな高くジャンプして蹴ろうとすると下着が……今日は白か。意外と純情タイプだな。いや待て、俺は何を言っている！

因みに俺がそんなことを考えていると瑠奈は格ゲーキャラのように突っ込んでいく。

「なに、伏兵か！」

「食らええつ、瑠奈特性『パニシュ・アタック！（消滅の攻撃）』」
「ぐへあつ！」

……ネーミングセンスびみょー。

しかし破壊力は凄まじいな。兄貴はゴキッという音とともに首が
凄いいほうに曲がっている。見てるほうが痛いくらいだ。

兄貴は泡を吹きながら仰向けに倒れ、瑠奈は着地と同時にブイサ
インを送ってきた。よくやった瑠奈隊員。

「これで今日は大丈夫かな？」

「どうだろう、兄貴のことだから二時間後に『何度でも蘇るさ！』
ってピンピンしてそうだ」

痙攣して全身を跳ね上げている兄貴を背に、俺と瑠奈は話しながら
階段を降りていく。

完全に目え覚めちゃったからな。

しかし階段の途中でつんざくような臭いが俺と瑠奈の歩行を止め
る。黒い煙がキッチンから上がっているが、火事の臭いではない。

「なあ瑠奈」

「なに、竜兄」

「すごく悪い予感がするのは俺の思い過ごしでしょうか」

「……敬語が気になるけど、多分その予感当たってると思うよ」

いかん、あまりの恐怖のために言葉が敬語になってしまった。

俺は覚悟を決めて階段を再び降り始める。瑠奈は今すぐ逃げられ
るような絶妙なポイントで待っている。卑怯者め。

震える手でキッチンの扉を開ける

「あ、お兄ちゃんオハヨー」

予・感・的・中！

腰から下しかないフリル付きのエプロンをして、キッチンミトンをはめている綾乃が目に入った。頬が炭で若干黒くなっているのは、また俺の勘違いだよな？　そうですよね神様仏様。

「お、おうおはよう」

「さつき上が騒がしかったけど何かあったの？　必殺技みたいな掛け声聞こえたけど」

「害虫退治だよ。人間サイズだな」

「ふん……」

疑問持たねえんだな綾乃……。

俺は長方形のテーブルに位置する一つのイスに座る。そしてキッチンノ扉でこそこそしてる奴を呼んだ。

「ああ……第二回デッド・オア・アライブ」

「そう言うな。俺も付き合ってやるから」

鼻歌を歌っている綾乃に聞こえないような小声で瑠奈と話す。

「付き合うつて……私たちは義理とはいえ兄妹なんだよ!？」

「その付き合っじゃねえ!」

「?　どうしたのお兄ちゃん、瑠奈姉」

キッチンミトンで鍋を握っている綾乃が首を傾げながら聞いてきた。

鍋……?

真夏の朝っぱらから鍋?

俺はキムチ鍋の記憶が蘇り、自然と汗が吹き出てきた。恐る恐る鍋の中身を見ると、汁物ではなかった。が、ビー玉くらいの大きさをした黒い物体がいくつも転がっている。異様な臭いを放ってるから、つんざく臭いの素はこれだな。

瑠奈は汚物を見るような目で、俺は鼻を押さえて綾乃に問う。

「「これなに？」」

「スクランブルエッグ作ろうと思ったんだけど、ちょっと間違っちゃって」

いやこれ『ちょっと』ってレヴェルじゃねえぞ。一昔前の保存食みたいな感じだし。食ったら間違いなくトイレにいく機会が格段に増えそうだし。

俺と瑠奈はどうやってこの危機的状況から脱するかを本気で考えると綾乃の瞳が潤んできた。ヤバイ、泣くぞこいつ。

「無理しなくて良いよ二人とも……。捨てるから」

「いやいや！」

「食べるから落ち着いて綾乃！」

二人で綾乃をなだめる。綾乃は涙を拭いながらくったくのない、にぱ〜とした笑いを浮かべた。

なんとかなだめることに成功したものの、どちらかがスケープゴート（生け贄）にならなければならない。どうしたものか。

と、ここでキッチンの扉がゆっくりと開く。ナイスタイミング！

「おのれ貴様ら！ ドナドナがダメならばアニソンの素晴らしさを教え」

瑠奈が皿の上にあるスクランブルエッグ（飯）を投球機さながらに連続して放り投げ、次々に兄貴の大きく開いた口に入れていく。兄貴はそれをもぐもぐと咀嚼し、

「ぐぶっ……！」

再び泡を吐いて倒れた。その泡の意味が良く分からなかった綾乃はキョトンとした顔になり、状況説明を瑠奈に頼んだ。

「これはつまり、そう、綾乃の勝利よ！」

「？ そうなの兄ちゃん」

「結果的にはそうなる。まあ気にすんな」

綾乃の頭を撫でて座らせる。瑠奈とアイコンタクトを取り、瑠奈がまともな朝食を作り始めた。

兄貴の泡がうつすらと赤くなっているけど、血じゃないよな？ ・

・・ま良っか♪

第18話：萌えとはなにか！！

「なあ兄貴……」

「なんだいマイブラザー」

いきなりアメリカンになってんじゃねえよ、純血日本人のくせに。

「一つ聞きたいことがある。これは瑠奈と綾乃とも意見を出し合った結果だ」

瑠奈と綾乃は俺の背中に隠れるようにして居間に寝転がる兄貴を敵意むき出しに睨んでいる。

その眼差しを敵意だと全く分かっていないであろう兄貴は気持ち悪い微笑みを二人に返し、瑠奈と綾乃は一目散に洗面所とトイレに駆け込んでいった。

俺も行きてえ……。

「なんで真っ昼間から萌えアニメ見てんだよ！ しかもDVDボックスだし！」

「ふう〜、いかん、いかんぞマイブラザー！」

兄貴はプラズマTVを一時停止し、床に置いてあるDVDプレイヤーを部屋の端に寄せる。意外と几帳面だな。

しわくちゃになったポロシャツの胸ポケットから真っ黒いメモ帳を取り出して俺に向ける。

「なんだこれは」「私直筆、萌えノート……!!」

どうだびっくりして声も出ないかがっはっはー、と言う顔をしながら兄貴はふんぞり返った。

俺は愚かにもそのメモ帳を受け取って音読する。

「萌えは1日にしてならず。まず猫耳&尻尾を装着してセーラー服を着、『な』を『にや』にして喋りましょう。語尾にもつけるとなお良し……」

く、くっだらねええええ……!!

そして俺は兄貴にこのメモ帳を返そうとすると兄貴の姿がどこにも見えない。あれ、どこいったんだ？

「マイブラザー、つまりこういうことだよ！」

俺は反射的に振り返ってその場に崩れ落ちる。

なんと兄貴は綾乃の制服を引っ張り出してきた、そのデカい図体にぱつつんぱつつんくらい押し詰めて着ていた。身長186cmのガッチリ体型の奴が着るセーラー服は面白いとか気持ち悪いとかそういう次元じゃない。一種のホラーにしか見えないし、吐き気まで催してくる。

「あ、兄貴…その格好を止めてくれ……死ぬ……」

腹の底から湧き上がってくる吐き気を制圧しながら頼む。だがそんなことはお構いなしとばかりに兄貴は自分の姿に見とれていた。

「うーむ、これが今の私か。意外と似合うではないか」

でっかい鏡の前で兄貴は惚れ惚れと自画自賛する。そしてやつちやいけないワーストスリーの一個をやりやがった！

「ほれほれマイブラザー、男の夢であるチラリズムだ。存分に堪能せよ」

「するかあああっ！」

兄貴の顎に向かって得意になった右ストレートを放つ。それは綺麗にはいつて、兄貴を夢の世界へと旅立たせた。

ふう、危なく目が腐るとこだったぜ。そして網膜に焼き付いた映像と記憶を消去しようと顔を洗いに行き、げっそりしている綾乃と瑠奈と廊下ですれ違い洗面所に入った。

ぬるま湯を溜めている最中居間のほうから、『キャアアアア！』とか『目が、目があああ！』って叫び声が聞こえる。

それとともに『綾乃、ロープとナイフ持ってきて！』と『鞭も持つてくる……くすん』という不適切な言葉も我が耳へ。

・・・まさか殺しはしないだろうな。

「おい、殺しをやると世界は平和になるが面倒なことに……」

顔を洗ってさっぱりした俺は居間の扉を開けて絶句した。

兄貴がパンツ一丁のブリッジしたような状態で手足を縛られ、瑠奈に鞭で叩かれている。あれ、ここ俺の家だよな？ 大人の階段を一気に上がったような気がするぜ？

すかさず綾乃が俺の腹に体当たりをして、俺はバランスを崩して誰もいない廊下側へ倒れる。綾乃は手慣れた手つきで俺の下腹部の

上に乗る、涙ぐみながら制服を見せる。

「お兄ちゃん……制服買ってえ」

「うーん、兄貴に着られてショックなのは分かるが財政的にちょっと」

「むぐう……」

あ、泣いた。

「ああもう分かったよ、買ってやるから泣き止め。そして下りろ」

そろそろ理性が危ない。

新しい制服を買ってやることを約束した綾乃は俺に礼を言ったあとすぐさま身を翻して瑠奈に加勢し始める。

「もおあんたのせいで『竜兄チェリー奪還作戦』が台無しじゃない！」

「瑠奈姉と私で必死に計画したのにい！」

ピシャーン、と鞭の良い音が響く。

「つか今瑠奈と綾乃はなんていった。なんかとんでもない計画名が聞こえたなあ。え、チェリーは何かって？ さくらんぼに決まってるじゃないか、アハハ……ハハ……ハ。」

「協力&立案者の海斗君のこと忘れてるよ綾乃」

「あそつか」

あやつもか。次あったらサブミッションコンボ食らわしてやる。

俺は瑠奈と綾乃にその作戦の概要を聞こうとしたがあまりにも怖

いので止める。ソファーに足を組んで座り、DVDプレーヤーを再生した。

画面上にいるメイド服のお姉さんが動き出す。

『……というわけで“萌”と言うのは生きる上で必要不可欠なのです。分かりましたか、ご主人さ』

しゃべり終わる前に停止ボタンを押した。

白昼堂々こんな見やがって……！

兄貴を蹴ろうかと思って綾乃たちのほうを向くと、恐怖の顔になっていた。

「どした二人とも？」

「あ、あれ……！」

二人の指差す方向には鞭が転がっている。どうしていいかわからない俺はそれを拾って、とりあえず全力で兄貴をひっぱたいた。

「ぬぐうつ、も、もつと！」

……なるほど、こういうことか。Mっ気を前面に出して来やがって。

「綾乃、そこにあるDVDプレーヤーの中身をくれ」

「これ？」

「そうそれ」

綾乃からソフトを受け取り、準備を始める。

俺の行動をイマイチ理解していない瑠奈が頭を傾げながら、

「なにをするの？」

「いや、これをこうしてだな」

ソフトの面上に使われなかったナイフを突きつけて、うつとりしている兄貴の眼前に出した。

それをみるやいなや兄貴は顔面蒼白になり、

「やめろ、止めるんだマイブラザー&シスター！」

「んじゃあ金輪際俺と綾乃と瑠奈の迷惑になるような行動はとるな」
「それは無理。てへっ！」

兄貴は言うタイミング、声の大きさ、その他において完璧に否定した。言い方は非常に喧嘩を売ってるとしか思えんがな。

それに対して俺はにっこりと微笑み、

パキッ！

ソフトを刺し砕いた。

「うおおおお！ マイDVD vol.7『キャサリン』がああああ！」

そんな名前があつたのか！？

兄貴はまるで世界の終焉を目の当たりにしたような絶望顔になり、綾乃と瑠奈たちは不敵な笑みを浮かべながらDVDボックスを壊し始めた。

我が家に平和が戻りますように……。

第19話：やっぱり凜先輩は強いです（by竜也）（前書き）

えゝ、発表します。

皆様のおかげでなんと読者数が三万人を突破しました！！

いやはや、もう感謝感激雨あらねなのです。なので次回は特別編を開催予定！ とは言っても単なる旅行編だったり……（笑

これからも竜也たちの応援、よろしくお願いします（〃＾ ｾ 〃）

第19話：やっぱり凜先輩は強いです（by竜也）

今日は部活の日。着いていく遊びにいくと騒いでいた瑠奈と綾乃は兄貴に任せて撃退し、俺は久しぶりに夏の日差しを浴びながら学校へと走っている。

「ふう、やっと学校についたぜ」

ふと気がつくと校門前に俺の担任と、コブラツイストをかけられている海斗がいた。・・・ゴリラがコブラツイストをやるんじゃない。

「おはよーっす」

触らぬ神になんとやら、俺は挨拶をして横を通り過ぎる。

「た、竜也！ このゴリラの化身をなんとかしてくれ！」

「すまん、それは無理だ。大人しく天に召されろ」

ぎやあああああああ、という叫びが真夏の青空に溶けて混ざり、俺は部室へと向かった。

部室へ入り、純粹無垢な後輩達に挨拶をされて返す。気のせいか、皆ぎこちない笑顔や放心状態になっている。

「おいどうした後輩達」

「部長が『良いこと考えたっ』って言いながらどっか行っちゃったんです……」

ふむ、確かに悪い予感だけがする。

とりあえずここに突っ立っているわけにはいかず、さらに泣き出しそうな後輩達をなだめながら各自やることをやらせた。

一時間経ち、二時間経ち。後輩達は脱獄でもするかのようにコソコソと逃げていき、残る部員は俺ともう一人。とはいっても俺と後輩Aはもう帰るのであるが。ちなみに凜先輩はまだ帰っていない。

「それにしても先輩、よく部長とコンビ組めますよね」

組んだ覚えは無いがな。

「まあなんつーか、慣れたんだろうな」

「へえ……先輩っ、頑張つて下さいね！ 私個人的に応援してますから！」

そう言いながら後輩Aはスカートを翻して走りながら去っていった。はて、なぜ顔を赤くしていたのだろうか。

歩きだすと、後ろのほうから誰かが近づいてくるのが分かる。そして、とてつもない殺気を放っている。俺はほぼ反射的に振り返り、

「……なんすかその奇妙な装備」

目の前には凜先輩が仁王立ちしていた。

ぶかぶかのヘルメットに安全第一のステッカー、どこから持ってきたのか分からないフリルつきドレス、そして片手には黒くてデカいスーツケースを握り締めている。統一感は一切ない。

「それよりも竜ちゃん、今のはなにっ！」

「なにつて、後輩と帰ってただけじゃないすか」

「うそ！ だって手を繋いでたじゃない！ あわよくばホテル街にまっしぐらだったんでしょ！？」

「……そついう誤解を招く言い方は止めて下さい」

まず手すら繋いでないし。

少し興奮気味の凜先輩はあまりにも危険で、いま別れると後輩Aの命が危ない。仕方がない、俺が受け持つか。

「んで部活ほっぽりだしてコスプレしながら肉体労働してきたんですか？」

「うっん、演劇部に乱入して、さらに小道具にヘルメットあったから奪…もらってきたの」

どっちにしてもまともな人の反応じゃねえ。

まあそろそろ先輩も引退するわけだし、ハメを外したいのかもしれない。

「そつよね、そろそろ私も受験だもんね」

・・・俺の周りにはプライバシーもなにも有ったもんじゃありません、助けて下さいお母さん。

十字を切った俺は涙をぬぐい、

「そつちのスーツケースはなんですか？」

「あ、これ？ 教えて欲しかったら部室まで来なさい」

「じゃいいっす」

俺はすかさず立ち去ろうとする。言ってから気付いた、あれは触

れてはいけないパンドラの箱だということを開けたが最後、絶望だけ出てくるに違いない。

【竜也は逃げ出した！】

【しかし凜先輩に回り込まれた！】

「ふっふっふ、私から逃げようってそうはいかないわよ」
「くっ……、ならば押し通る！」

俺は軽やかに跳躍し、凜先輩の横を通り過ぎる。が、そこは凜先輩、カウボーイさながらの技術で俺の首にロープを引っ掛けた。

つまり俺は犬みたいになっているということだ。

「さ、部室行くわよチャッピー」

「行きますからその呼び方止めて下さい……」

そんなこんなで俺は部室に引き戻され、凜先輩は制服に着替えた。気に入ったのかヘルメットだけはそのままかぶっているが。

「んで来たからにはスニーカーの中身見なきゃいけないんですよ？」

「うん、じゃーん！」

どうだ凄いだろう誉めてくれ、と言わんばかりの顔をしながら凜

先輩はスーツケースを開け放った。

中から出てきたのは多種多様で、暗視ゴーグルやら赤外線カメラやら望遠レンズとか、携帯型PCに代えの電池とか、見るからに毒々しい液体の入った瓶とかがゴロリと机の上に置かれた。

「えーっと、反応に困るんですが」

「え、なにに使うかって？　しょうがないなあ、教えてあげるよ」

スルーかよ。てか使い方なんて聞いてないし。

「これらは私が趣味で集めたもので、竜ちゃんのお私生活を盗聴してたの」

「へえ、俺の盗聴ですか」

「うん、盗聴」

・・・。

「盗聴！？　今の今まで盗聴されてたんですか俺！？」

「反応鈍いよ……。まあ付け加えて言うならば隠し撮りもしてただよ」

ぐ！　と親指を立てた凜先輩。

あの、犯罪をした自覚はないんでしょうかねこの人は。

つーかまてよ、二十四時間フルスペックで監視されてたとなると・

・・、

「くくくくくく」

「凜先輩、その写真って……まさか……」

「そう、竜ちゃんのお風呂写真よ！」

やっぱりな、凜先輩の行動は不可解だがこういう抜け目ないところはさすがとしか言いようがない。

しかも写真は凜先輩が所有してるが、マスターデータの入ってるディスクを回収しないことにはどうにもならん。

「さらにさらに、竜ちゃんが夜に【ピー】していたところも撮影済み」

「変なところで伏せ字使わないで下さい！」

一応フォローしとくけど、【ピー】の部分にはなにもいやらしい単語は入らないよ。・・・なんだその嘘つきを見るような目線はあ！

「さあつて、次は編集しなくちゃ。私と竜ちゃんの思い出を、と」

「もう、止めて下さい……」

ちなみにこのあと俺は精神崩壊を起こしかねた。

だって凜先輩のPC容量のうち八割方俺に関することだったからね。うう、俺は生まれてきたことを後悔するぜ。

「あ、私の家にあるPCなら全データ竜ちゃんと私ね合成写真が詰まってるから」

・・・もう良いです、好きにして。

第20話：旅行計画発動（前書き）

さてさて、前回の前書きで予言しました通り旅行編です。

第20話：旅行計画発動

気づいたら、俺はバスの中にいた。他にも綾乃と瑠奈、凜先輩に兄貴、そして海斗もいる。

綾乃と瑠奈と向き合えるようイスの背もたれに腹をくつつけながら凜先輩はトランプをしていて、兄貴と海斗は萌アニメ『キラリン』について熱く語っている。

俺は頭の後ろを掻きながら、うんうん唸って次の一手を考えている綾乃に話しかけた。

「なあ綾乃」

「うーん、ここはJでバックさせようかな、それとも8で流そうかな……」

うん、完全に大富豪にハマって聞いてないね。

「一緒に考えてやるから答えてくれ」

「なになに!?!」

「あ、ずるーい!」

「ちよつと竜ちゃん、えこひいきはダメよ!」

凜先輩と瑠奈は手をぶんぶん振り回して抗議しているが、そんなもん俺には関係ない。目をきらめかせる綾乃に尋ねる。

「このバスはどこに向かっている。そしてなぜ俺はここにいる」

「えーとね、私たちも起きたらここにいたの。だからわかんない」

、じゃない。んじゃもう一つの疑問を聞くか。

「俺の後頭部が割れるように痛いのだがなぜだ」

「ああ、たぶん瑠奈姉がさつき膝蹴りしたからだと思う」

膝！？ 後頭部にやったら下手すりゃ、いや上手く当てても死ぬぞ。

我が義妹ながらハードボイルドというかワイルドというか・・・。

「違あああう！ 明日香はツンデレだから人気NO.1なんですよ！」

「ふっ、愚か者め！ ドジっ娘二ナミちゃんを忘れてなにがNO.1か！」

白熱も白熱。俺ら以外の乗客皆が嫌な顔をしながらこちらを白い目で見てくる。ああ、これ以上評判を下げないで普通の生活を送らせて下さいな。あ、ちなみに敬語使ってるのが海斗ね。

そんなこんなでバスが走ること一時間と半分。そろそろ車酔いしてきた俺をよそにどんどん白熱するアニメ会話とトランプ。窓の隙間からは地平線まで穏やかな波が伝う海が見えてきた。反対側の窓にはそんなに高くはないが山がいくつか連なっている。ふむ、どうやらここが目的地らしいな。

運転手の声が流れる。

『えゝ、終点です。後ろに陣取ってアニメを語っている方は速やかに降りろやコラ』

・・・この運転手怖え。

この気持ち悪さから解放されたいがために俺は一番最初に降り立った。

「うお……すげなこ」

潮風がこれでもかかってくらい流れてきて、俺の肌をすくう。が、なぜか気持ち悪さは悪化し、近くのベンチにへたり込むように座った。

目をつぶって上を向く。心頭滅却なんとやら。

どすん、という重力を太ももに感じて俺は目を覚まし、凜先輩の唇と俺の唇がくっつくまであと数センチといったところだ。

「何やってんすか凜先輩！　つーか瑠奈も変なところに座るな！」

「ちえー、もうすぐだったのに」

何がもうすぐだ。俺の初キスはもうちょいまともな感じにしてくれ。

そして今度は俺の膝に乘っかりながら抱きつく形で密着する瑠奈を引き剥がす。まったく、油断も隙もあつたもんじゃない。

「竜兄ノリ悪いー。そこは『……良いんだな』って言いながら私をベンチに押し倒すところだよ」

「知るか」

なんで俺が昼ドラみたいな展開をしなきゃならんだ。あ、誰だサービス精神の足らん奴めって言ったの。

今の騒動のおかげか、酔いは一気に取れた。立ち上がり、

「おい竜也」

「ん、なんだ」

「お前の分だ」

ずい、と大きなボストンバッグを渡される。とりあえず受け取って見たが、

「なんだこれは」

「着替えとかもろもろ。誰が計画したかは知らんがこの旅行は泊まりがけ、さらに四泊五日だ」

「四泊五日!? めちゃくちゃ遊べるじゃねえか」

幸いここには山も海もある。ちよつと歩けばパツと見高級そうなホテルがある。誰だか知らんがこの企画はサンキューなんだぜ。久々のナイス展開!

「では諸君、いざゆかん高級ホテルへ!」

「「おおー!」」

兄貴のかけ声が木霊し、俺たちの夏休みパラダイスが始まりを告げた。

二十分くらい歩いただろうが、いつの間にか瑠奈のカバンを左手に、綾乃のカバンを右手に、自分のバッグを背中に、凜先輩のバッグを腹にかけている俺がいた。なにこれ、罰ゲーム?

体感温度35 の炎天下、なにやら意味深な含み笑いをしている女性陣を背後に俺と兄貴と海斗はホテルに向かう。

「にしても不思議だよなあ」

「ん、お前が持つてる4つのカバンのことか?」

それもある。

「いやな、どうやらお前らも理由すら知らずにここに来たんだろ？
迷惑じゃないが、なんか計画的な気がして」

「ふっ、これだから我が弟は低脳で困る」

やれやれ、と言った顔つきで兄貴が肩をすくめた。なんだろうね、
この腹の下から沸き起こる殺意は。

「んじゃ誰が計画したんだ？」

「知らん！」

俺は両手に持っていたカバンを思いっきり振り回して兄貴をサン
ドイッチにした。

兄貴はそのまま気を失い、焼き付けるような熱さの道路にバーベ
キューにされたことは言うまでもなく。

「お、入り口発見」

海斗が指差すその先には、うん、あれはどうみたって裏口だね。

「バカやってねえで行くぞ」

兄貴を除く五人はホテルの内部へと入っていった。

第21話：天罰天誅鞭ハレルヤ君

海と山。この自然二大景観を一気に楽しめるところはそう無いだろう。それがここでは楽しめるし、ちょっと歩けばデパートや電化製品専門店、服屋に宝石店まであるという豪勢っぷり。四泊五日とはいえ、全てを回るのは困難であると言えよう。

それゆえか、今は別行動をとっている。左半身が焦げている兄貴と、不気味な含み笑いをしていた海斗は電化製品専門店へ行きたいとロビーで暴れ出したので許可し、俺も身の保証のためにそちらに行こうとしたのだが甘かった。

凜先輩のフェイバリットウェポンである『天罰天誅鞭ハレルヤ君』により脳天をぶっ叩かれ、気を失ってしまった……。

そして今現在、目の覚めた俺はビーチパラソルの下にいた。

「くっそ……、頭がガンガンする」

「あ、竜兄起きた」

真っ赤なビキニに身を包んでしゃがんでいる瑠奈が隣にいた。俺は頭をさすりながら上体を起こした。

「おう瑠奈。あれ、綾乃と凜先輩は？」

「海の家にかき氷買いに行ったよ」

「そうか、……ところで一つ聞きたい」

「ん、なに？」

ずんずんと接近しながら瑠奈が言う。くつつくな、ただでさえ暑

いんだ。

「なぜ俺は水着になっっている」

そう、ハレルヤ君に殴られた時はノースリーブに七分というラフな格好をしていたはず。

「着替えさせたから」

・・・平然と答えやがった。

てか誰があ！？ 綾乃も瑠奈はまだしも、凜先輩は犯罪予備軍なんですけど！！

いやいや、予備軍どころか一軍に抜擢されてもおかしくない。つまりは犯罪者なわけで。

「……誰が犯罪予備軍よ」

「はい、お兄ちゃん」

二人で四つのかき氷を持って来てくれた。

俺は綾乃が渡してきたかき氷を受け取り、凜先輩は瑠奈にかき氷を渡した。お、赤いからいちごシロップか。

「あゝ疲れた。竜ちゃんなかなか起きないし、いろいろしちゃったじゃない」

「それは凜先輩が女王様の武器を振り回したからであって——っ
ていろいろってなんすか！ 綾乃、そこで頬を紅く染めるな！」

かき氷そつちのけで猛然と立ち上がる。

くっ、このタイミングで綾乃の頬が染まったということはまた俺の人権無視が始まったのか。

「そうだよ綾乃、まだ序の口なんだから」

「そ、そうだよね。お兄ちゃんのピーがピーになってるのはまだ序の口だよね」

ふう、と落ち着いたため息をはく綾乃。言うのが恥ずかしいのかピーなんていう伏せ字まで使いやがって。

ああ……俺のプライバシーはなんて無力。殺虫剤を目の前にした蟻のような気分だ。

俺は気を取り直すかのようにかき氷を一口食べて、思いっきり吐き出した。

「うわ汚っ！ ちょっと竜兄、どうしたのよ」

「ちよっと、いやかなり変な味してさ。なんだろ、鉄みたいな味が」

しかしこの赤さはどこをどう見てもいちごシロップ……いやまてよ、赤と鉄。もしかしてこれは、血！？

「綾乃、この赤いのって」

綾乃の代わりに凜先輩が答える。答えるというか、ボロ布のようにボコられた痕がある海斗を地中から引きずり出した。

「彼の血よ」

「——何でまた血祭りに？」

どしゃあ、と膝から崩れるように倒れた海斗に近寄り脈をはかる。ちっ、生きてやがったか。

海斗は今にも死にそうな体で、震える声を出す。

「赤外線カメラ……お…前に、託す。絶対に、奪われるなよ」
「瑠奈、カメラやるよ」

海斗から受け取ったカメラを瑠奈にパスした。

「裏切り者おおおおお!!」
「悪いな、綾乃が映ったかもしれんカメラは兄として処分する。犯罪だし」

瑠奈はフィルムを取り出して、ネガを日差しに当てる。これで見えないものにはならんな。

そして俺が海斗に電気あんまをしている最中、瑠奈と綾乃と凜先輩はナンパ男達を半殺しにしながら土を掘っていく。

因みにナンパ男は、大事な大事な息子を瑠奈と凜先輩に蹴られて再起不能になってました。うお、想像するだけでこっちも痛くなる。

「ギブギブ、竜也もうギブ! ぎゃああああ!」

「竜ちゃん、海斗君連れてきてー」
「あいよー」

電気あんまの足を止め、泣きながら息子の安否を確認する海斗を引きずっていく。

その先、なんと十分足らずで一人一人がすっぽりと収まるような穴が出来ていた。あ、因みに縦にね。つまり顔だけ地上に出せるような感じ。

「んじゃ海斗、今から埋めるぞ」

「……息子が赤ちゃんみたいに小さいぜ」

海斗と発言を半ば無視し、次々に土を被せていく。

よし、完成！

「やったー！ 人柱完成！」

「生け贄生け贄」

「今宵の鞭は血に飢えておる……殺！」

瑠奈、綾乃、凜先輩の順で口々にする縁起でもない言葉。

綾乃は海の家で買ったであろうスイカをパラソルの下から持ってきて、瑠奈はせっせと浜辺で泥団子（貝入り）を製造し、凜先輩はハレルヤ君にお経を唱え始める。

うん、俺が一般人なら確実に通報する。

え、俺は何してるかって？ 海斗が気絶した時にぶっかける海水を汲んでるんだ。つまり、俺たちの気が済むまで海斗は気絶すら出来ないというわけ。

「な、なあ竜也」

「なんだ？」

「これから起きるのは、全て現実なんだよな」

「ああそつだ。充分に堪能してくれよ」

ガシガシと海斗の頭を引っ掻き回し、女性陣三人にアイコンタクトを送る。

「よし、それじゃ」

「公開処刑を」

「始めましょう」

「頑張れよ海斗」

綾乃はスイカを海斗の頭の横に置き棒を振るい、瑠奈は試し打ちをするかのように貝入り球を放り投げ、凜先輩はピシィ！と元氣よくハレルヤ君を扱う。

時刻は闇が支配し始める夕暮れ時。そんな中溶けるように消えていく海斗の絶叫は、天にいる兄貴の耳にも届いたであろう。合唱。

「竜也のバカやろおおおお！」

予定変更、俺も攻撃隊に加わるか♪

その頃の兄貴。

ビーチから聞こえる絶叫を耳に、たった一人ホテルの中でなにか怪しい作業をしていたりしていなかったり。

「ふっふっふのふ……、海斗君、君の死は無駄にはせんよ」

第22話：肝試し、腕試し

生け贄になった海斗を全力でボコボコにしてから数時間。夜は静まり返る丑三つ時。

俺たち六人は懐中電灯を片手に山へ向かって歩いていた。そう、夏休み恒例肝試しである。

そもそも肝試しが世に広まったのは……、

「はい、要らない説明しないの」

「いや伝統を伝えるのは大事だぞ？」

瑠奈が読心術を使いながら俺に追いついてきて突っ込む。

道無き道を開発するかのようにな邪魔な枝をへし折っていく海斗と兄貴。その後ろで俺が取りこぼしは無いか確認しながら歩き、女性陣はゆうゆうと付いてくる。

ま、こういう仕事は男の役目だから仕方ないが……。

「ほらほら早くしなさいよ」

「頑張つてー」

「ハレルヤ君が火をふくわよ」

好き勝手なことを言いまくる女性陣。てかさっきからハレルヤ君の先っちょが俺の腰に当たって痛いんだけど。

「ふう、やっと到着したな」

「うむ、さすが我が進路図。肝試しにはもってこいだな」

先陣を切っていた兄貴と海斗が足を止め、暗闇の奥を眺めながら頷いている。

ふむふむ、森と言えば森だが整理はされてないな。確かにかなり気合いが入った肝試しが出来そうだ。

「ね、ねえ竜兄」

「どした？」

「お兄ちゃん」

「綾乃までどうした」

気のせいかな、二人の顔は青ざめて引きつってすらいる。こんなことは珍しいな。

「あ、あれ……」

「ん？ 看板？」

瑠奈の震える指の先には、赤錆だらけの看板が横たわっていた。こう書いてある。

『自殺者多し、遭難者多し。気をつけろ、魔の手はすぐそこに』

・・・これか。

柄にもなく瑠奈はへっぴり腰になり、綾乃に至っては軽く全身を強ばらせている。凜先輩はそんな二人を羨ましそうに見つめ、頭の上に懐中電灯を置いて光らせた。

ウルトラクイズか。

「竜ちゃん、怖い」

「嘘つきは嫌いです」

「って楽しそうに言ってたじゃないか。しかも顔はよからぬことを考えてそんな笑顔だし。」

抱きつくかのような凜先輩を片手で制していると海斗がなにかを発見した。

「こっ、これは!！」

「やだぁー!」なにになになになに!？」

綾乃がものすごい速さで、それこそどこまで遠くに行けば気が済むのかというほど遠くに行ってしまうていた。もちろん来た道に戻っただけなのだが。

俺は瑠奈と凜先輩に迎えに行くよう頼み、海斗のもとに行く。兄貴は横たわっていた看板を縦に置き、正拳突きの実習をしている。わけわからん。

「どした、なに見つけた？」

「エロ本、しかも裏あべしっ!」

殴ろうとしたら、遠くにいたはずの兄貴が一瞬で海斗の間合いに入って膝蹴りをかます。そして本を奪い取る。

「けしからん、けしからんぞ海斗君! このような素晴らし……やましい本は私が使わせ……処分する!」

「本音だだ漏れだぞ兄貴」

兄貴からも奪い、雨風にさらされてぶわぶわになった本を思いっきり引き裂いてから遠くにぶん投げた。その後、兄貴と海斗が悲しみにより発狂し森の中へと走り去っていった。

ま、肝試しのチーム分けが楽になったから良いけどね。

そんなこんなで時間を潰していると、やっとこさ綾乃と瑠奈と凜先輩が戻ってきた。

「お兄ちゃん、海斗君が見つけた物って何だったのッ!？」

未だ怖いのか、今すぐにも逃げられるかのような体制になる綾乃と瑠奈。そして逃げられないように腕をロックしている凜先輩。

「ああ、単なる本だよ。それより早く肝試ししよう」

「チームはどうするの?」

「ええー! 皆で行こうよー!」

「そっだよそっだよ! この脚フェチ竜兄ー!」

「誰が脚フェチだ!」

ずいぶんと懐かしい話を持ち出しやがって。

四人で肝試しに行っても面白くもない。やっぱり二人一組だな、でも怖がり瑠奈と綾乃を同じチームにしたら、下手すると警察沙汰になりかねない。

というわけで、

「瑠奈と綾乃、お前らは俺が凜先輩のどちらかを選んでもらう」

「竜兄!」

「お兄ちゃん!」

うん、そう来ると思った。

凜先輩は凜先輩で俺と行けないことがショックなのか、かなり落ち込んでる。

「話は最後まで聞け。話し合いでは埒があかないので凜先輩に選んでもらう」

「えーっと、私が一諸に行きたいのは竜ちゃ……。綾乃ちゃんが良いです、はい」

昔取ったなんとやら、睨んだら凜先輩は大人しくなり綾乃を選んだ。

綾乃はなんとなく名残惜しそうにしていたが、大丈夫だと言いつけてなんとか先行させた。凜先輩と綾乃の背中が闇へと消え去るのを待ち、消えたところで瑠奈のほうを向く。

・・・見なきゃ良かった。

瑠奈はさっきまでの恐怖はどこにいったのか、後ろ向きでガッツポーズを取っている。しかも小声でなんか言ってるし。

「……先行くから」

「ちょ、待って待って!」

呆れ加減で歩き出すと瑠奈は慌てた感じで追いかけてきた。

「まったく、心身共にか弱い義妹を置いていくなんて」

「身はともかく心は嘘だろ」

「そんなこと言ってる、襲うよ?」

それは俺のセリフ……じゃない! 俺が襲ってどうする! ふう、危うくやつ誘導尋問に引っかかるところだったぜ。

それはそれとして、整備されていない道は不便で仕方がない。生い茂る木々や枝を避けたりへし折ったり、滑るような足場は踏んで固くしていく。瑠奈はそうして整備した道を悠々と歩き、

「せいっ」

「うおっ！」 蝶のように舞い、蜂のように脳天唐竹割り（チョップ）をして猫のように後ろへ逃げた。普通に痛いんすけど……。

「終いにや怒るぞ」

「んもう、いつもMのくせに急にSになるのは嫌われるよ？」

臨機応変と言ってくれ。そもそも嫌われるって誰にだよ！ 瑠奈や凜先輩に嫌われて俺に対する悪戯が減るなら大歓迎なんだがな。

そんなこんなで歩き始めてから千五百秒。つまり二十五分、懐中電灯をぶんぶんと振り回して闇を照らしながら『くくく、きつとくる』なんて歌っている瑠奈の声がぴたりと止んだ。

そしてたわわに実った二つの果実を俺の左腕に押し付ける。うん、この感触は間違いなく胸だな。しかもブラの固さが分かるような、尋常じゃない力で締め付けてきて血が回らない。

「離してくないと進みにくいんだが」

「前かがみにならないで言ってよ……」

なんて的確な突っ込みをしながらも、瑠奈の眼は恐怖に染まっていた。珍しいな、本当に怖がってる。

「どした？」

「なんかさ、うめき声みたいなの聞こえない？」

耳を研ぎ澄ませる。・・・確かにそう言われれば、男のうめき声みたいなのが聞こえる。さらに言うならばなにかを引きずるような音すら聞こえる。

幽霊？ んなバカな。幽霊はプラズマなのです！

なんてよく分からないことを考えながら瑠奈を背後に回し、近づいてくる音から守る位置に。

「瑠奈、危ないから少し下がってろ」
「う、うん」

瑠奈は言われた通り数歩下がり、俺はファイティングポーズを取りながら何回かステップを踏む。剛柔流、魅せてやるぜ！

音の正体が、細木をへし折りながら現れた。

「ぬおおおお！ 秘密スポットが呼んでいる！」
「そ、それより早くこの本をホテルに……って瑠奈ちゃんと竜也あ！？」

音の正体。

藻を全身にくくりつけてずぶ濡れの兄貴に、それを追う形でダンボールを持っている海斗が全力で走っている音だった。うめき声は兄貴のかけ声だったようだ。

海斗は俺たち二人を見たあと足を滑らせて豪快に転び、ダンボールの中身が宙を舞う。

すると兄貴は限界ギリギリの体制からターンして中身を全てかき集めた。なんだろう、ケースみたいなのが見えた。

「お、おう竜也、なにしてんの？」

「そりゃこっちのセリフだ」

「わ、我々は決して露天風呂を覗きに行こうとは……」

「またもや本音を口に出した兄貴。
つーかこいつらには、

「なあ瑠奈」

「なに？」

「こいつらに熱いお灸を据えないとな」

「うん、私も同じこと考えてた」

一致団結、交渉成立。

俺と瑠奈は巨悪の根元である二人を挟むように周りこみ、悪魔の
微笑みを浮かべる。

「くつ、海斗君、我々に残された道は……」

「滅びのみ、ですかね……」

巨悪の二人はケースを抱えるようにしゃがみこんだ。

「覚悟は良いな（ね）？」

「「我らが生涯に一片の悔い無しい！」」

夏の山、真つ暗の闇に男二人の絶叫が溶けて混ざる。俺と瑠奈は
そのあと二人を放置して帰ったのは言うまでもなく。

最後までケースの中身は見れなかったけど、なに入ってたんだろ
？

第23話：犯罪VS犯罪

朝飯を食う。女性陣は昨日遅くまで起きていたのか、真っ昼間の今も起きてこない。仕方がないので俺を含む男性陣は各ベッドの上でぐーたらしていたり。

「なあ竜也ー」

「あんだー」

「地球滅びねーかなあ」

いきなりダークネスな会話だな。

しかも天井を虚ろな目で見ているあたり嘘とも言い切れないのが怖い。

「どうした急に」

「いやな、せつかく海と山に来たのに部屋にいて男とすし詰めだし竜也はキモいし臭いし……」

「よし、そのまま死ね」

ベランダを指差し、飛び降りを促す。俺は臭くない！ さっき風呂に入ってたわ！

そんな馬鹿なやりとりをしていると、『瞑想！』なんて言いながら座禅組んで寝ている兄貴の携帯が鳴った。

「兄貴ー、電話」

携帯を放り投げ、キラリンのオープニングテーマが流れる携帯を放り投げた。うん、逆パカしたい。

携帯が弧を描いて落下しベッドに一度バウンドした瞬間、兄貴は起動したてのロボットのように目を開け放ち拾いざまに通話ボタンを押した。

素晴らしい速さだ、十点！　だがそれがム力つくから－十点。

「あーもしもし、私は僕であり我なのだが」

意味分かん。

「……………おい愚弟」

「なんだ」

「『俺俺、実は今脱線事故にあつてさ、モンゴルに帰れないんだよね』って電話なのだが、思い当たる人物いるか？」

懐かしいな俺俺詐欺。

「つか脱線事故とかいう重い話を持ちかけて同情をはかろうとしてるのだろうが、その規模の事故はニュースになる。そして今はそんなニュースはないので、詐欺けてーい。」

「海斗、兄貴とタッグ組んで詐欺師をなんとかしろ」

「ためして合点でい！」

『ためして』は要らない。そしてなぜ時代劇ノリ……。

海斗は受話器を挟むように兄貴とくつつき、おもむろに旅行バッグからノートパソコンを取り出して次々とコードを取り出して接続している。

赤とか黄色とか様々だが、市販では見たこともないようなもので。

兄貴は海斗の行動を見たら気色悪い齒を惜しげもなく見せて笑い、

「あー君君、そんなことしてると地獄に行ってる親が悲しむぞ?」

と説得じみたことを言い始めた。確かに悲しむだろうが、勝手に相手の親を殺して地獄送りにしてる兄貴も酷いもんである。

まあとにかく兄貴は詐欺師と十分ほど話し続け、海斗はPCのデスクトップに『完了』の文字が出てから兄貴に見せた。

「君と話したことは楽しかった、だがお別れのようにだ。せいぜい余命を楽しむがいい」

物騒なことを言って電源を切った。

海斗はコードを乱雑に取り外しながら手慣れた手つきでまとめ、兄貴にノートパソコンを渡した。

すると兄貴は目にも止まらぬ速さでキーボードを打ち始めていく。

「……なにしてんの?」

海斗が答える。

「今の声紋をPC内部に記録し、(省略)さらに今受信した電波をもとに(中略)自作改良型逆探知機を組み合わせ(大略)……云々……」

なにを言っているのか分からないことが分かりました。

「もうちょい簡単で明瞭に、親切かつ丁寧にかいつまんで教えてくれ」

「・・・ずいぶん優しく言ってほしいんだな」

すると兄貴がカタカタやりながらこっちは見ずに答える。

「まあなんだ、今の奴の住所特定と動かぬ証拠、家族構成から友人知人に至るまで調べ上げるんだ。あとは履歴か」

・・・

それも犯罪っ！

んー、でも詐欺をする奴も悪いしな。自業自得として納得してもらうよりあるまい。

そいつ以外に迷惑がかかるようなら全力で阻止しなければならんが。

「クツクツク、楽しくなってきたな海斗君」

「八つ当たりもかねてせいぜいいたぶりますかね、フェツフェツフエ」

危ない奴らめ。

このまま俺も同じ部屋にいたら汚染されるので、一階にある土産屋まで足を運ぶ。

途中瑠奈たちの部屋もノックしたが返事は無かったのでまだ寝てる可能性もある。寝る子は育つっていうけど、悪知恵ばかり発達しましたよ妹たちは……。

様々な人がリラックスをしている空間に出て、キーホルダー類を見ていると女性陣に会った。

「あれ、寝てなかったの？」

「ついさっきご飯食べてきたとこだよ。ところでなにしてんの竜兄」
「見て分からののか、キーホルダーを見ている」

瑠奈の後ろで凜先輩と綾乃が若干暗い雰囲気であるが、どしたんだ？ 食中毒だったら嬉……悲しいな。

「どしたんだ二人とも」

「ああ兄ちゃん。あのね、私と凜先輩は夢を見たの」

「私が跪く竜ちゃんの頭をハイヒールで踏みつける夢で、綾乃ちゃんが竜ちゃんを食べる夢見たの」

勝手にそんないかがわしい夢見ないで下さい。

俺は少しでも心配してしまった自分自身を罵倒しながら、女性陣のあとをついていくことに。なんか買物物したらしいから荷物持ちつつとこだね。

まず最初についたのは極々一般的なスーパー。俺らが住んでる街よりは比較的安く仕入れることが出来るらしい。

そんな中凜先輩が言い放つ。

「竜ちゃん、闇鍋しない？」

「闇鍋っすか？」

既に両手いっぱい野菜とか肉をぶら下げている状態で聞き返す。後ろにいる綾乃と瑠奈は闇鍋という言葉の響きだけで心ときめいている、それだけに不安が募る。

「まあいいですけど、食べられるもの入れて下さいよ？ それと、もう食べられない」なんて逃げるのも無しなら」

「交渉せいらつゝ。あ、他の男子にも言っておいてね。」

「お兄ちゃん、お金お金♪」

「竜兄、有り金有り金♪」

結局俺の金か……。さて、俺はなにを買いますかねえ。

てかスーパーの袋を持ちながらホテルに戻るのか？ ちよつと気が引ける……。まいっか。

第24話：天魔降伏闇鍋パーティー（前書き）

また長期休載してしまい、待っていた読者の皆様には多大なご迷惑いるのかな...をおかけしてしまいました（汗）

なにとぞこれからも応援よろしくお願いします♪

第24話：天魔降伏闇鍋パーティー

さて、闇鍋というものは忘年会か新年会でやるものであり決して真夏のリゾートホテルでやるものではない。

そんな一般常識を知ってるか分らない五人をまとめるのは俺だけであり、そんな事ができるならばどっかの国の大統領にでもなれる。

・・・個性豊かなメンバーは嬉しくもあるが、いろいろと精神的にくるものがあると非常に困るわけで。そしていままさに精神的攻撃をせんとばかりに海斗が厚さ十センチはあるであろうA4サイズの紙の束を渡してきたわけで。

それを無言で受け取り、淡々と読み上げる。

「米倉正次、三十二歳、妻子あり。ピー県ピー市に住んでおり兄弟はおらず、不動産勤務であつたがクビにあい……」

俺は顔を押さえながら溜め息をついた。

「なあ海斗」

「どうした、作者に名前を忘れられた愚かな男」

俺の持つっている紙より五倍は厚いものを瑠奈に渡そうとしていた海斗がクビだけ向いて返事した。

「ぬ……仕方ないだろお前らに比べてキャラ薄いんだから」

「ふふふ、世代交代が必要なようだな。とまあ身内ネタはこれくらいにして、なんかようか？」

ルール違反ギリギリなネタを切り上げてくれたやつに軽く感謝し

ながら、

「これは一般的に犯罪と言われるものでなかるうか」

個人情報を超えてこれ以上ないってくらい搾り取ったのは、もはや警察ではなく裁判所のお世話になるやもしれぬ。そんな危険な紙を、絶対に見せてはならない二人の女性の片割れがなにこれ、とばかりに覗き見る。

阻止しようとした俺の努力虚しく、見てしまった女性は嫌な笑いを浮かべながら手帳を取り出す。

「ふんふん、全く関わりのない人だけどこの情報収集能力は使えるわね。海斗くん、これどうやったの？」

「え？ ああ詳しくはその人に聞いてくれると嬉しくかな」

と、部屋の隅でちんまりとした机に違法改造を施したノートパソコンとプリンターを設置し、床には色とりどりのコードを散乱させている兄貴を指差した。

その雰囲気、まさに真剣！

俺はこめかみに青筋を浮かべながら優しく兄貴の肩に手を置いた。

「兄貴、いったい何してるんだ？」

よくぞ聞いてくれた！ とイスを吹き飛ばして立ち上がった兄貴は自信満々に言う。

「まずはだな、録音しておいた音声により逆探、さらに私が改造したパソコンと、海斗くんが提供してくれたデータをインストールするとあら不思議、がべっ！」

「ご丁寧に指まで立てて自慢していた兄貴の懐に入り、鳩尾にショートアッパーを叩き込んだ。悪、ここに散る。」

そして犯罪知識を身に付けようとする瑠奈と、犯罪知識を教えようとしている海斗をぶん殴った（瑠奈ははたいた）。

すると、ベッドを移動させてだっ広くした部屋の中央で鍋をぐらぐら煮ている凜先輩と、その横で調味料を握っている綾乃から死の宣告、もといご飯を知らせる言葉をいただいた。

「竜ちゃん、皆ーできたよー。といつても基本的な味付けだけど」

魔界から復活した兄貴と俺と瑠奈、そして海斗が鍋を取り囲むように座り、皆で一点を見つめた。

「？ なに、お兄ちゃんも瑠奈姉も」

皆の視線の先、そこには首を傾げる綾乃の姿。

「まさかとは思いますが凜先輩、」

「味付けは綾乃に任せてないですよね……？」

以心伝心、瑠奈と見事なまでのタイミングで尋ねる。凜先輩はあはは、と手を左右に振りながらそれを否定した。

「そんなことしないよあ、私だってまだ死にたくないし」

くつつたくの無い笑顔で残酷なことを言い放った凜先輩。調味料を持った死神は相変わらずクエスチョンを頭の上に浮かばせながらやりとりを見ていた。

安堵のため息をつく、すつくと立ち上がった兄貴。手にはどこ

から取り出したのかマイクが握られている。音頭をとるらしいな。

「ウェッホンゴホゴホ、ゲホゲホ、ハクシヨン！」

・・・なげーよ咳払い。しかも最後のはくしゃみだし。

「えーそれでは第一回、“生き残るのは誰！？ 天魔降伏、疾風迅雷、闇鍋パーティー”を開催するっ！！」

キイーン、とマイク独特の音を響かせながら、今まさに闇鍋大会が始まった。

満足したのかはい、と隣にいる海斗にマイクを渡す兄貴。

「それではルールを説明するっ！ ルールは簡単、皆が持ち込みあった食材を食べるといふなんら変わらない闇鍋ではあるが、二つほど我々の命運を左右する出来事が待っている」

次にマイクは時代外れな割烹着が何気に似合っている凜先輩に渡された。

「一つは言うまでもなく分かってるわね、料理界のクラッシャー」と綾乃ちゃんよ」

ビシッと指差す先で綾乃はえへへ、と笑っている。結構ストーリーに味オンチと言ったはずなのだが、それに気づかないあたり天然というかなんというか。

「そしてもう一つ！ 闇鍋という魅力はなにか！ 何が入ってるか分からない緊張感？ 食べた時の吐き気？ そう、それらも確かに魅力的ね。でも最大の魅力は読んで字のごとく、闇よー！！」

勢い良く立ち上がった凜先輩は天井にある丸い蛍光灯の電源を消すように海斗と兄貴に言った。

二人は部屋の隅に移動し、部屋は闇に包まれた。幸いか不幸か、昼には晴れていたのに夜は月が雲によって阻まれ、唯一の光であった蛍光灯を消した今は自分の手すら見えない。凜先輩のテンションが上がっていく声が聞こえる。

瑠奈と綾乃の、『ねえ、もしかしたら竜兄を襲えるんじゃない？』なんていう危なっかしいセリフは聞かなかったことにする。

「この闇を利用しない手はないわ。食材を全て入れて、綾乃ちゃんの食材を最初に食べた者は罰ゲーム。食べてない他の人は食べた人に対し闇に紛れ殴るもよし、交配するもよし、つまりなんでもありってわけ！」

『おおおー！』と喜びに震えガッツポーズをしているに違いのない兄貴と海斗、『思わぬ形で夢が叶うかもしれない』とはしゃぐ妹ズのボルテージは際限なく上がっていく。

綾乃の食材だけで既に罰ゲームな気がしなくもないが、そしてなんとなく俺に不利な気もするが、俺はそれに乗ることにした。

さて、俺を覗く全ての者が食材を入れ終わった。食材を鍋に入れていく音をダイジェストで伝え、海斗はパラパラ、兄貴はねとー、凜先輩はゆるりんぽんっ、瑠奈はドボドボ、綾乃はコポコポ、である。二つほど不可解な音があったが、自分も食うのでそこまで変なものを入れていないだろう。

部屋には特殊な臭いが満ち溢れ、気を抜くと黄泉へ旅立ってしまうほど。

「おら竜也、早く入れやがれ」

「うむ、我が弟ながら愚鈍である」

「これ以上変な音たてたら承知しないからね竜兄」

と急かすような言葉を背後に、俺は輪切りにしたネギとイチヨウ切りにした人参というなんのひねりもない食材。

・・・つまんねえ主人公め、なんて突っ込みは禁止！

「全員入れたわね？　じゃあ鍋に手突っ込まないように順番にお椀によそって食べることに」

司令官のように指示を出す凜先輩。ちなみに順番は海斗、兄貴、俺、綾乃、凜先輩、瑠奈の順。少々理不尽である。

最初に食べた者が罰ゲームならば、後に食べるほうがぜん有利である。そして真ん中という一番危険な位置にいる俺は当たる確率がかかり高いわけで。

するといつの間にか自分のお椀によそっていた海斗は、

「えーい、ままよー！」

と掛け声一発、ずずずと咀嚼していく。そして五秒後、

「う……なんか納得をビール漬けにしたような味がする」

と、綾乃の食材は食べていないことをアピール。綾乃のだったら言葉をはけるような余裕はない、あれはまさに非の打ち所がない完璧な兵器なのだから。

そして兄貴。

「我が胃袋に敗北はないっ！」

もりもり咀嚼し、ごつくと音を立てて飲み込む。

「ふ……我、難関を突破せり」

と息も絶え絶えに言った。

そうして俺の番。俺の今までの経験上、百パーセントの確率で俺に当たる。普段はアイスの当たり券すら拝んだことないのに、こういう場合は百発百中で当てる。

真っ暗闇の中、手探りで鍋のお玉を握って自分のお椀に注ぐ。

「さあ竜兄、一気にぐいーっと！ その後は……えへへ」

「お兄ちゃん頑張れ」

「ふふ、楽しみ楽しみ」

食材を食べていない女性陣は余裕の現れか、俺に不安を煽る。

「ふう……俺の人生短かったなあ」

嘆きながら口に食材を流し込む。

「！？ これ、俺の食材……ってぶお！」

ネギと人参というひねりの無い食材が当たったというのに、俺が綾乃のやつを食べると予想してた凜先輩と瑠奈はすかさず猛然とタツクルして来やがった。

「くつ、俺は食べてないぞ綾乃の食材！」

「「ええ！？」」

仰向けに倒された俺は、腹と肩にある四つの柔らかい感触に理性を奪われないよう必死にもがく。凜先輩と瑠奈は余裕が外れたことに驚いていたがやがて含み笑いをし始めた。

いまいちルールを把握仕切れていない綾乃が一人で食材を食べて倒れる音がしたあと、牙を剥き始めた瑠奈と凜先輩は、俺の両手足を器用に押さえ込む。

「先輩、いまは共闘しましょう」

「あら、私もいまそれを言おうとしてたところよ」

フフフのフ、と微笑んでいるであろう二人の姿が容易に想像出来た俺は、今から何をされるのだろうと不安に思いながらも、どうやって部屋内で鍋が出来たんだろうというどうでも良いことを考えていた。

「人生楽あれば苦あり。俺の楽はいつ来るのでしょうか……」

呟くと同時に、俺の上着があつという間になくなったことは言うまでもない。

第25話：アーケードで地の利は奴に（前書き）

受験面倒、（、旦那）ノ

……や、いいなかっただけです。

更新が遅れに遅れ、終わりはいつになるのやら……。
へたれ作者ですが、飽きずに応援よろしくです（汗

第25話：アーケードで地の利は奴に

さて、地獄のような昨晚から一転し世間は平和に包まれている。広々とした青空には雲すらなく、潮風は浜辺にいるカップルたちを優しく撫でて歓迎する。

そして俺は今小規模なアーケード街へと足を進めている。フロントの人に土産を買う場所があるかどうかを聞いたところ、ホテルからしばらく迂回したところにアーケード街が新設されたとのことだった。

幸か不幸か、女性陣とは別行動をしていたので男水入らずでここまで来た。しかし、

「よう竜也、俺たちはこれから別行動をとらせてもらう」

「え、なんで？」

「ふっ、知れた事！」

ピチピチのアロハシャツを着込んでいた兄貴が大声を張り上げる。

「夏と言えば海、海と言えば俺たち、俺たちと言えばナンパなのだっ！」

ワハハハハ、と行き交う人々の迷惑も考えずに笑う兄貴。海斗がその背中を押しながら歩き始め、

「ま、そんなわけで。夕方には帰るから、じゃ」

遙か前方にいるギャルっぽいお姉様方に突進していった。

「……ま、いいけど」

個人的に動けるといふメリットは嬉しい。そして何より、水入らずとは言っても問題児なあの二人とはあまり関わりたくないのだった。

そういえば朝食を食っていなかった。ホテル内の食事で済まそうと思ったのだが、あの値段は反則だ。地域特有の食材を使っているという点は素晴らしいのだが、高校生な俺には手が出せなかった。外、海の家で食べようかと思っていたのだが朝飯のことをつい忘れ、アーケード街のほうに足が向いていたのは魔がさしたとしか言いようがない。

そして今、目の前には庶民の味方ファーストフード店がオープンしている。海と山に囲まれた場所にある不自然さはあるが、気にしない。

「さて何を食いますか、ね……」

店に入ろうとした足が止まる。石化したわけじゃないし、店に入れないわけでもない。直感が、いや俺の中で芽生えつつある未来予知がこう告げている。

ここにいてはいけない、即刻逃げろ！

未来予知は瑠奈たちに対してのみ発動するのだがその的中率は侮るなかれ。

反転し誘惑の臭いから逃れようとした矢先、肩を後ろからむんと捕まれた。痛い痛い、爪が肩に食い込んでる！

「どこ行く気い？ 竜兄」

「予感的中！ って握力弱める握力、なんか骨がミシミシいつてるんですけど！」

微笑みながら謝り、手を離す瑠奈。俺の肩にはびっしりと爪の痕が残っている。あー、絆創膏欲しいかも。

「んで、なんか用か瑠奈。てか綾乃は？」

因みに凜先輩は闇鍋で綾乃の食材に殺されてしまったのでホテルで寝込んでます。悪は滅びる。

「——うはぶしっ！ あゝ、私の噂してる奴がいる。この感じ……
竜ちゃんだな。帰ったら覚えてなさいよお！」

？ なんか今謂われ無き悪寒を感じた。言うなれば理不尽の一言に尽きる。

「綾乃なら先輩の看病するって」

「まさか責任を感じたのか？」

「違うと思う。あの子自分の食材で先輩がああなったって知らないもの」

ですよー！。

もし綾乃がそれに気付いたらこちらとしては嬉しい限りなのだが、

あからさまに落ち込むからなあいつ。慰めるにはとっても高いレアチーズケーキが必要なのだ。経済的制裁と肉体的制裁を両立させる恐ろしい技。

「ま、それはそれとして竜兄は暇？ 見たところ一人だし」

「暇と言えば暇だね。ゆったり過ごそうかと」

あつという間にその夢は潰えたがな。

「ふん。……ねえ、お願いあるんだけどいい？」

瑠奈にしては珍しい、真剣な面もちで尋ねてくる。
普段ならば撤退を決め込むところだが、真剣なやつを邪険にするほど瑠奈たちには愛想がつきているわけでもない。

真正面に見据え、こちらにも気合を入れて向かう。

「ああ。どうやら真面目な話っぽいし」

「ありがと。——あのね、竜兄ってプライドというか誇りってある？」

「誇り？ んー、人様に言えるような素晴らしいものはないけど、自分が納得出来るものならあるぞ」

「あ、やっぱりあるんだ」

組んだ手をもじもじさせながら、遠くを見つめるような目つきで上を向く。それにつられ、俺も上を向く。

アーチ型の透明なガラスを天井に構え、そのまた天にある空から太陽がジリジリとこちらを照らす。瑠奈は手で日陰を作りながら、

「あのね、私も竜兄と同じような誇りならあるの。初めて人に言う

んだけど、笑わないで聞いてくれる？」

「ああ、笑わないよ。その誇りに関連した悩みがあつて、それが俺にも手伝えるようなことがあれば力になるよ」

ぽんぽん、としおらしくなっている瑠奈の頭を撫でる。

まあなんだ、コイツも年頃なんだな。血は繋がってないし、いつもからかわれてばかりだが大事な妹なんだ。たまには兄貴らしいことをしてやりたい。

「あのね、私の誇りと悩みなのは、」

「なのは？」

瑠奈は息を呑み、ぱつと顔を上げて言う。

「下着が気になって仕方ないの」

・・・。

どうしろと？

「いやあのな瑠奈、俺は男だ」

「それがどうかした？」

「女ものの下着について語られても困る」

せいぜい、見られても良いような下着があるくらいしか知らない。海斗あたりに聞けばもっと詳しいことを知ってそんな気もするが。

と、ここで瑠奈が今まで見たことのない最上級の微笑みをしながら俺の言い分をスルー。

「でね、そこにあるランジェリーショップについて来てほしいの」

にっこり笑って死刑宣告。

女子高生が男子校生に言うセリフではない。ましてや妹が。

「嫌だ。断る。拒否！」

首をぶんぶん振り回しながら抗議する。

すると瑠奈はあからさまな落ち込みようで、

「さっき力になるって言ったのは嘘だったんだ……」

わざとらしい涙を流すのだった。

「瑠奈、目薬見えてる」

「っ!？」

ビクッ、と体を震わせた瑠奈は右手の隙間から見える目薬のフタをこそそと隠す。遅えよ。

そんな過去に使われたネタは俺には通用せん！

「とにかくだ、ランジェリーショップに行くなら綾乃か凜先輩に言ってくれ。俺じゃ力になれん」

「ごしごし、と涙を拭った瑠奈。

「えー、竜兄だって私の下着に興味あるくせにい！」

「ない！ なにが悲しくて妹の下着になんぞ興味を持たねばならんのだ」

「だってこないだ瑠奈と私の下着を交互に見てたじゃない！」
「んなワケあるかあっ！ 俺がいったいいつそんなこ……と、を…
…」

失速する俺。

そう、瑠奈のあまりにも真剣だった態度に騙されて忘れていたが
ここは腐ってもアーケード街なのだ。

老若男女問わず行き交い、更にここはファーストフード店。中に
いた客や店員は何事かとこちらを凝視している。

背後のオバサンたちからは何か良からぬ評価が下されているし。

ニヤリ、とヒールな笑みっぷりを見せてくる瑠奈。
くっ、民の力を仲間にしやがったか。

「分かった、行こう。ただし中には入らん」

「それじゃ意味ないじゃない。中まで入って私に似合うものを探し
てくれないと」

「んなこと言ってもだな、あそこは男子にとってアウェイ以外の何
物でもないからな」

しばし考える瑠奈。今にも泣きそうな顔をしながら、

「竜兄だって私と瑠奈の両方に二股かけて、」

「分かった、行く！ 行かせて下さい！」

『両方に』らへんで瑠奈が何を言つか察知した俺は言葉を塞ぐよ
うに叫ぶ。

ようやく瑠奈はいつもの瑠奈に戻り、うなだれる俺の腕に自分の
腕を絡める。暑い。

「結局お前に振り回されっぱなしか……」

「ふふ、そこが良いところなんだから」

ひそひそ話をしている人達を掻き分けながらランジェリーショップを目指す。

ふと今思った。なんでこんなところにランジェリーショップがあるんだろう。

隣で幸せそうに鼻歌を歌っている瑠奈がこちらの耳元でぼそりと呟く。

「私今上の下着してないから」

「ぶっ……!!」

「あはは、冗談よ冗談。竜兄面白いんだから」

ああ……願わくば神様。瑠奈の下着選び中は俺に災難を与えないで下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3585b/>

妹と義妹

2010年10月9日13時16分発行